
戦う魔王様! ?

かりうむいおん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

戦う魔王様！？

【Zコード】

Z0618Z

【作者名】

かりりむじおん

【あらすじ】

諸々の理由で、勇者一向に紛れ込んだ魔王様。しかしその勇者がアレな人で……。勇者×魔王だけどこんな攻めでいいのか?、なコメディ。一般向けですので性描写が入りそうになると、時間が吹飛びます。気楽に楽しめる話にする予定(未定)ですのでよろしくおねがいします。

追記・すびばるにも投稿するかもです。また、ジャンルを恋愛に変更しました

血迷った選択（前書き）

イメージでは昔読んでいたよつな、少女漫画 + 少年漫画 + B級な「メティ」です。疲れたときに読むと元気になる話を用意してます。

一般向けBLの方が良いのかなと最近書いていて悩んだので、こちらにも投稿することにしました。

はじめは設定の関係上、ちょっと暗めかもしません。

血迷つた選択

「久々の獲物だ、逃がさないぜ！」

「キヤ！」

悲鳴を上げて逃げ惑う美少年約一名。

それを追い掛け回す剣を腰に下げた変態。

ちなみに、この変態は勇者である。

「H A H A H A、捕まえたぞ！。わあこれから俺と一緒に愛の楽園へ……」

「……レオン、いい加減にしろ！」

そう、カノンは魔法の杖で勇者レオンを殴つて気絶させた。

とりあえず、逃げ惑っていた美少年には、すみませんと謝り、勇者レオンを回収していく。

そして、気絶したこのアホ勇者をずるずると引きずりながら宿へと戻る。

この分だと地面との摩擦でまたズボンが破ける事になるだろ？が致し方ない。

お金の管理をしているカノンには頭が痛い話だ。

何故僕がこんな事を……。

幾度となくした自問自答を再び繰り返し、カノンはつぶやく。 答えは決まっている。

それはカノンが勇者レオンの“幼馴染”だからだ。

やつぱりアレだ。事前の下調べを面倒だったからしなかつたのが敗因か。

初めて会つた時、結構骨のある奴でこいつなら良いかも、と思つたのに。

なのに、まさかこんな奴だなんて。

幸いカノンの事は“幼馴染”だからだりう、対象外なので口説いたりはしてこ無い。

カノンはフードで顔が見えないようにしているが、本当はさうめくばかりの美少年なので真っ先に口説かれると予想される。

なのにそうならないのは“幼馴染み”フィルターのおかげだ。

そしてそもそも、勇者本人が自分で言っていたのだから、間違いないだろう。

はあとカノンは溜息をつく。

いかんせんこの勇者は弱過ぎる。

というか、美少年やら美少女やら美熟女やら美しき紳士やらを口説く前に剣の練習をしようと。

あの時は、もっと強い勇者だと感じたのに。

とんでも見込み違いだ。

はあと再び溜息をついて、宿の扉を開ける。部屋には勇者の仲間がいるはずだ。

カノンは魔法使いとして彼らの仲間の一員をしている。

ついでにお金の管理も。一番カノンが安心出来るからと、勇者レオンに渡された。

その時カノンは思つた。

こいつの安心出来るは絶対信用しないと。

もう一回カノンは溜息をついた。

現在勇者達は魔王を倒す旅に出ていた最中だつた。

ちなみに、カノンは魔王である。

呻くように頭から血を流し睨みつける勇者。

すでに他の二人の仲間は、瀕死の重症だつた。

そんな絶体絶命の勇者を、魔王カノンカースは不敵に見下ろした。魔物の瞳である金の瞳に宿る冷酷さと傲慢さが見て取れる。死神とも言えそうな黒い衣装に、銀色の長い髪。

恐ろしく整つた美しい容姿が、更にかの魔王の恐怖を引き立てていた。

「何だ、お前はこの程度か?」

「まだ……俺はまだやれる！」

勇者はふらつきながらも立とうとして、膝をつく。既に勇者も限界だった。

その様子に魔王は嘲笑う

「無理をするな、人間。
元々人間が我ら魔王に勝とうなど、
思いあがよりも甚だしいのだ」

「おお、多くの勇者たちがいた。お前が倒れて、俺は勇者と云て、それでせん？」

「もいるぞ？」

だからといって、ここで諦めるわけにはいかない！」

それで馬鹿にしてしまつた魔王は笑ひ、詰問で防ぐ。

その結界にはじかれて勇者が転がった。再び起き上がりうとする

も、既に勇者にはそんな力は残されていなかつた。

赤い血。

魔王は魔物としての衝動で、勇者の口を伝う血を舌で舐め取る。それに僅かに勇者が目を見張り、魔王を凝視する。その様子に、魔王は笑う。

廣雅

「なんだ？、頬が赤いぞ？」

昌子にたのんで舐め取った。それだけだ。

「非常」美末じつしそ？、「お前の血は…」

魔王は艶かしく勇者に微笑み、そのままもつて一度その血を舐め取

それが痛かつたのだろう、勇者が苦悶の声を上げた。

「さて、お前の記憶を少し読み、書き換えさせて貰う。なに、全てではない。それに、ちょっとした拍子に元に戻ってしまうものだか

ら、それほど恐れるものではない

「止める……やめ……」

必死に勇者が声を搾り出す。けれどそれに魔王は薄く笑みを浮かべるのみ。

「今のお前の力では勝てないと分かっているだろ？。なに、次に目を覚ました時には、この事は忘れている。そして僕の事を仲間の一人だと思っている事だろ？。ふむ、お前の幼馴染に魔物とのハーフが……しかも死亡している？」

「やめ……違……」

「ではその者に僕は成り代わる？。短い間であるうが、よろしく」

「やめろ！』

そう叫んで、勇者は意識を失った。

その間に魔王は記憶の書き換え、および治療を仲間ともどもしてやる。

そして、瞳の色を、片方だけ金のままもつ片方を青色に変化させて、魔法使いのような出で立ちに魔王は変装する。

元々、昔の話だが人のふりをしていたことがあるのだ。造作も無い。

ローブのフードをかぶり、顔が良く見えないようにする。あまり容姿をさらすところくな事にならないのだから。

一通り変装が終わり一息つく。

そして倒れ込んでいる勇者を冷たく一瞥して、

「せいぜい利用させてもらうとしよう

そう、魔王はにやりと笑つたのだった。

後になつて思えば、それこそが運のつきだった。

血迷った選択（後書き）

つづりあわす

お前はすでに絆をされている

「あ、カノンちゃんお帰りなさい」

柔らかいピンク色の髪の、美少女のような少年イオが何やら「使い」の大入しい青い髪の青年トランの背中に薬を塗っていた。

「トラン、頼まれれば僕が治療したのに」

「ははは、トランは魔物が嫌いだからね」

「僕は魔物扱いか」

実際そななだけどね、とカノンは心の中で舌を出す。

そこで、イオがカノンが引きずつている物体Xに田をやる。

「あれ、レオンまた誰かをナンパしてたの？」

「ナンパなんて可愛いものなのか、僕は時々疑問に思つ」

「まず直球で、やらせて下さい、だからね。そんな事を言つたら普通逃げるよね」

「何であんな……」

「カノンちゃんは昔から一緒になんでしょう?。知らないの?」

「……ある日突然ああなつてしまいまして」

「きっと、カノンちゃんが振ったのがいけないんだよ」

「あのね、僕はそういう対象にならないってレオンも言つていただろう!。まったく……どうしてすぐに恋バナにするかな……レオン、逃げるな、正座」

「はい」

大人しく正座するレオンに、カノンはお説教を始める。

勇者として、というか人としての、最低限守るべき常識として考えられるものをぐじくどと耳にたこが出来るほど何度も話さなければならない。

何が悲しくて魔王が人間に説教せねばならないのだ。

「……わかったか?」

「わかった」

輝くばかりの眩しいレオンの顔を見て、カノンは理解した。

こいつ、絶対に分かつていない。

そこで、レノンの顔が近づいてきて、カノンの銀髪に触れる。

一瞬どきりとカノンはします。

いや、だって、レオンもあんなふざけたりしなければ、意外に整った顔をしていて、綺麗な金髪で、空を映した瞳で……って、いや、アホ勇者だ、アホ勇者。

そもそも人間ごとに魅了されるなど魔王として風上にも置けない。

しかも、この軽薄な奴に。

「ほら、鳥の羽が付いていた」

レオンの手には、黒い鳥の羽があつた。

「あ、ああ……取ってくれてありがとう」

「いや、見えたから。でもカノンは付けたままでも良かつたかも」

「何でだよ！」

「だって黒がカノンには似合うから」

無邪気にレオンが言うその言葉に、カノンはぎくつとする。と、「駄目だよレオン。黒が似合うなんて、黒は死と夜を想像させる。かの魔王もそうだしね。好きな子にはそんな事言っちゃ駄目だよ？」

「うん、分かった。でもカノンは“幼馴染”だから」

「そつか、恋愛対象にならないかあ」

にまにまどこちらを見るイオ。

「何だ、何が言いたいんだ。

それに、どうして僕が少しがつかりしたような気持ちにならないといけないんだ。

わけが分からぬ。

「……それより、近くで魔物が暴れているそだから、それで賞金稼ぎをしないか？。でないとしばらく宿に泊まれない所か、朝食が水だけに……」

「さすがに植物みたいに、光合成して生きていけないよな……。力

ノンも果物食べられなくなるし。今の時期、よく取れる果物があんまり無いんだよな……」

一応相槌を打つが、カノンは魔王というか魔族なので肉食に近い雑食である。

そのレオンの幼馴染の魔物とのハーフとやらは、魔族の中でも特に珍しい種族で、基本果物しか食べない魔物である。しかもその見目麗しさから、人にも魔物にも狙われるという可哀想な人型の種族だ。

もつともかの魔族よりも更に際立つた美しい容姿をしているのが魔王を含めた高位の魔族だつたりするのだが、それはおいて置いて、「わかつた。大切な“幼馴染”を食えさせる訳にはいかないから、俺、がんばる！」

「そ、そうか、分かった。じゃあ、僕は依頼を受けてくる申請をしてくるから……」

そうほんのり頬を赤くして、カノンは部屋から小走りで出て行く。どうも調子が狂う。

ここ一週間ほど一緒に居ただけなのに、その度に、カノンはレオンの奇行に悩まされつつ、気が付けば突っ込み役をやつていた。「えー、でもカノンちゃん、レオンのそういう役所だからね」

そうにこやかに笑うイオに、どう考えても記憶操作に失敗しているとカノンは気付いた。

だが今更記憶操作を再びするのも難しい。下手に齟齬が生じて、全てが台無しになつては元も子もない。

そもそも、何故にこんなイオという踊り子と、獵師のトランが仲間なのだ。

もつとこう戦いに強そうな者を仲間にするものではないのか。ちなみに仲間になつた馴れ初めを聞くと、酒場で意氣投合してこなつたらしい。

「俺、実力でのし上るタイプだから！」

良い笑顔でレオンに言われて、そういうつてが無いんだなどカノ

ンは理解した。

なので他に仲間を誘おうにも、レオンの奇行はすぐに有名になってしまい、そんな奇特な人間はない。

もつと良識のある仲間がカノンは欲しかった。

ボケ役になりたい。でないと疲れる。

本当にレオンは変な奴だ。なのに、カノンがついもつと仲間を探してしまったりするのは、“幼馴染”という理由からだろ？がレオンがカノンにどびきり優しいからだ。それにいい奴だし。

ああもう、自分は魔王だというのにどうしてこんな……。

カノンは、小さくやつてられないと呟いて、その思いを振り払つかのように走り始めた。

カノンが部屋から出て行つた後。

「それで、レオンちゃんは本当の所、カノンちゃんの事をどう思つてているの？」

「どう料理してやろうかなと」

「……レオン、まだカノンちゃんを完全に捕まえていないでしょ？」

とらぬ狸の皮算用、つて言うじゃない？」

「確実に捕まえるつもりだから問題ない」

そうにつけとレオンは笑つてみせる。

他の奴らを口説いているのも、全部カノンに気にかけてもらいがたいためだ、と言つたらカノンはどんな顔をするだろう？。

「信じてもらえないんじゃない？」

「否が応でも信じざる負えない状況にもつて行けばいい。俺はカノンが欲しい」

「……カノンは止めた方がいい」

「トラン、幾ら魔族が嫌いだからって……」

「あれは駄目だ。レオンも諦めた方がいい。辛い思いをする前にそんなトランに、レオンは、ははっと笑つた。

「大丈夫だよ、あいつの事は本当に昔から知つてている。だから大丈

夫なんだ」

それ以上、トランは何も言わなかつた。納得していないなどレオンは思いつつ、さてと窓から顔を出す。

通りかかる人を物色してから、にやりと笑つた。

「そこのお姉さん、ぜひ俺と……」

そこまでしかレオンは言えなかつた。何処からともなく、兎の置物が落ちてきてレオンは氣絶する。

それを見て、イオが思い出したかのように手をぽんと打つた。
「そういえば、カノンちゃんがレオン対策魔法を設置したとか言つていた気がする」

いい嫁さんだねー、とイオは気楽そうに笑うも、すぐ傍のトランは元々の寡黙な性格もあるが黙つたままだつた。

お詫せあれどお詫せれど（後悔）

読んで頂れありがとうございました。

次回更新は未定ですがよろしくお願ひします

森の魔の山はる里心

何故ここにはキノコの魔物しかいないのだろう。

先ほどから延々と現れては腰?、を揺らしながら踊るキノコを切つたり、ナイフやら矢で突き刺したり、火炎系の魔法でバーベキューにしたわけだが。

「よし、これでしばらく食事には困らないな!」

レオンが山盛りになつた焼かれたキノコの前で高笑いする。

確かにこれだけの量があれば当分食事に困らないだろうとカノンは思う。

但し、連續してキノコを食べる事に耐えられれば、の話だが。そこでイオが残念というように首をふる。

「残念だけどそういうものいかなんだ。それ全部毒キノコだから」

「え? 本当に?」

「だよね、トラン」

「ああ、その類の魔物は食べられない。確か養殖しようとして間違えて毒キノコの魔物を量産して、手に負えなくなつたから放置したとか何とか」

そんな事で魔物が増えたのかと思うとかノンは頭が痛くなる。ちなみにカノンは魔王なので魔物が増えるのは喜ばしいはずなのだが、現在魔王である事を隠しているので力が使えない。故に襲われる。

それを差し引いても、どうしてこんなに嬉しくないんだだろう。

「じゃあどうした方が良い? 毒物を放置していいのか?」

「……勇者としての力で浄化すれば終わりです」

「そういえば、俺、勇者だつたな。忘れていた……カノン、嘘です。だから杖を構えないで」

仕方が無いといったようにレオンが剣を構えて、そこでふとトランが何かを思い出したように言った。

「赤いキノコだけは、結構な高値で売れる。獵師の間では隠れた小遣いになる」

「じゃあ分けるか。宿代やら食費やら出るかな?」

ちょっとレオンは嬉しそうだ。そこで、ふとイオが気付いたように、

「トラン、これなんで高く売れるの？ 毒でしょう？」

「毒と薬は表裏一体。ただそれは、“大人”が嗜む物だ」

“大人”という下りにレオンが反応したので、カノンは杖で軽くレオンの背中をつついて牽制する。

しかしそんなレオンの行動など気付かず、イオが更にその意味を問い合わせる。

「……つまり？」

そこでトランがこぶしを握つて言い切つた。

「自分の中にある工口願望をひたすらしゃべつてしまつという薬だ」「聞いた事がある……。その薬により、数多のカップルが分かれたという伝説の……」

「ああ、恐ろしい薬だ」

そうトランは額の汗をぬぐう。

カノンは思った。こいつらがレオンについてきた理由が何となく分かつた。

似た者だからだ。

となるとカノン自身も彼らに似ているといつ恐るべき事実がないな。

それにそもそもそんな薬、どうでも良いじゃないか。、

「……別に、工口願望口走るぐらい、いいじゃないか。誰かを傷つけるわけでも無いし」

が、その言葉にレオンがやけに反応した。

「カノンは分かつていない！ いいか、人間の脳内にある妄想が一番工口いんだぞ！」

だからどうした！、とカノンはシッコリ対願望を抑えつつ、そう

熱意を持つて力説するレオンに、お前なりやつだらうなとカノンは溜息をついて、

「いや……頭の中にあるものを言葉なり、文字なり、絵なりで表そうとしても、その限界は存在する。そうでなければ言い間違いや聞き間違いは起きないはずだから……」

「つお、珍しくカノンがまともに話してくれる」

「……わざと散々説教した事を忘れてるみたいだから、もう2ターンぐらいお説教しこうか」

「ああ、俺の纖細な心がそんなに怒られやけりと硝子のよつに砕けちやう!」「

「纖細だつたら少しば行動を改める! うつかりこの前胃薬を買おうか迷つたじやないか!」

胃薬常備の魔王つてどんなどよ、そもそも魔王つて偉そりにしてればいいものなはずなのに、どうしてこうなった。

カノンは心の中でむせび泣く。と、

「ちなみに買ったのか?」

レオンがちょっと心配そうにカノンを見る。

心配されて嬉しいと思つてしまつたカノンは、すぐさまその諸悪の根源がレオンだと思い出す。

なので少し恨めしそうに一言。

「……残金が

「じめんなさい」

「まったく……いや、レオンにそのキノコを食べさせて恥ずかしい思いをさせるかな。その方が薬になるだらうか……」

そこでイオが慌てたように口を挟む。

「だめ、カノンちゃん。それだけは絶対止めた方が良い!」

「イオ、でもそろそろレオンにお灸を……」

「もしもカノンちゃん、レオンにエロエロな感じで口説かれたらどうするの!」

「待て、イオ、何故俺が口説くのが罰ゲームになつていいんだ?」

「やうだな。危なかつた。イオ、ありがと」

「……おい」

「どういたしまして。いやね、カノンちゃんにパーティ抜けられる
と本当に戦力的にきついからさ」

「……無視しないで」

「はは、それはどうも。でもイオの短剣の扱いは中々だと思います
よ?」

「……あのー」

「本音を言つと、カノンちゃんの事気に入つてるから、いて欲しい
なつて」

「わー、嬉しいですねー」
ちなみに記憶操作する前に、カノンはイオをフルボッコにしてい
たりする。

そんな考えをおぐびにも出さず、にっこりとカノンは微笑んだ。
そこで、耐えられなくなつたのか、レオンが叫んだ。

「む・し・す・る・な

その言葉と同時に、特に大きい踊るキノコの魔物が現れたのだつ
た。

「ふう、何とか倒したな。お?」
レオンの体が薄く光つている。

「これは……レベルアップの予感!」

カノンはいつも時は口に出れなくてもいいのでは無いかと思つ
た。

一応黙つて立つているだけで様になる姿なのに、口を開くとど
うして格好が悪くなるのだか。

そこでいつもと違い、白い粉がくるくると回つて、

「あ、じゃあアレで。ええ、その技でお願いします」

そうレオンが独り言を呟くと、それは消え去る。

今までに見たことが無いので、カノンは問いかける。

「今何?」

「ああ、技を覚えたんだ。どれがいいか選択したんだ」「どんな?」

「うーん、強化系?、かな」

「どうして?、がつく」

カノンは嫌な予感がしたのだが、そこでレオンがカノンに抱きついた。

「俺ようやくまたレベルアップしたよ、褒めて褒めて!」

「え、いや、あの……」

カノンは突然レオンに抱きつかれて、顔を真っ赤にしてどうしようかとおろおろする。

助けを求めるようにイオとトランを見ると、トランはいつも通りの無表情で、イオはにまにまと笑っているだけで助けるつもりは無いらしい。

「カノン、褒めてくれないのか?」

「……ああ、はいはい、いいこいいこ」

頭を撫ぜてやると、レオンは更に嬉しそうにカノンに抱きついてきた。

それが嬉しいと思う反面、カノンは、これは“幼馴染”に対する好意なのだろうと悲しくなる。

何で僕がこんな思いをしなくちゃならないんだ、これも全部レオンが悪いとカノンは心中で思つたのだった。

森の木の上せり田心（後藤也）

読みでいただきありがとうございました。今日はもう一回更新したい

シリアルズは歩いてくる？（一）

宿に戻つてからふとトランが思い出した様に付け加えた。

「そりいえばあのキノコ、酒につけて売つたほうが高く売れるんだよな」

そんな訳で手分けして、酒と漬けるための瓶を買いに行つたわけだが。

「酒が売り切れ？」

すぐに任務から脱出しようとするレオンの襟首を掴みながら、カノンは酒屋の親父さんから聞いて首をかしげる。

「……お酒は作るのに時間がかかりますよね？ それがこれから数ヶ月無いつて……何故売り切れなのですか？」

「いや、なんでも有名な勇者御一行の戦士が無類の酒好きらしくて、全部買い占めていつてね」

「全部買い占めてつて……樽の跡を見た限り、20以上……」

「ちなみに一段に積んであつたんだがね……」

「それ、全部一人で飲むのですかね？」

「そう言つていたな」

親父さんとカノンは沈黙する。どう考へても人間の体に入る量じゃない。

「まあ、有名な勇者様達だから、そういう事もあるのだろう。じゃあそろそろ店を閉めるから……もしも五日後でいいなら、隣町から仕入れて数本は用意できるが？」

「あ、いえ、そこまではいいです。ありがとうございます」

「そりかそりか、所でお嬢さんは、ここにいつまで滞在するんだい？」

唐突にお嬢さんといわれてカノンは、目が点になる。

「あの、僕は男なんですが」

その言葉に、親父さんはえつとういう顔をして慌てたようにな。

「え？ あ、いやすまない。あまりにも別嬪さんだつたもので……
最近美少年やら、美少女やらが攫われる事件が多発していくね。そ
の半分は魔族の仕業らしいが……」

「残り半分は？」

「人買いだよ。そういうのは魔族にも貴族にも高く売れるからね。
それに最近、そういうた美少年やら美少女所か、年をいつた人まで
声をかける変態勇者がいるそだから気よつけたほうがいい」

最後の下りはうちの勇者ですとは言えず、カノンは黙つて頷いた。
そして、ふと自分が掘んでいたレオンの襟首がやけに軽いことに
気付く。

よくみると、服だけになつていた。

「あーいーつーはー」

「さつき、にそこそ上着だけ脱いであつちに行つたから、今から追
いかければ間に合つんじやないかな？」

「教えてくださいよ！」

「いや、何となくこの前、妻に趣味で高い模型を買ったことがばれ
た時に似ていて、つい」

とりあえずカノンはありがとうございました、と酒屋の親父さん
に挨拶して走り出したのだった。

そんなカノンを見ている人影に、カノンは気付きつつも無視した
のだった。

「お前のようなのが勇者だと？ 笑わせるな！」

ちょっと大き目の通りに人だかり。それと怒声。

カノンは非常に嫌な予感を覚えて、人だかりを覗き込むと、案の
定レオンが居た。ついでにイオとトランもいる。

大きい野生的な筋肉質の男、背中に巨大な斧を背負つていて。そ
の男が今の言葉を発したのだが、それに対してイオが食つて掛かつ
た。

「そつちこや、そんなヒヨロヒヨロのにこやかな勇者で大丈夫なん

ですか！」

「お前……ホーリィロウ様に、なんて事を！」

「ふん、レオンの事を馬鹿にする奴は僕が許さない。トランもそうでしょう？」

「ああ、貴方方にとつてはレオンは矮小な存在に見えるかもしけないが、これでも我々の大事な勇者です」

「これでも、という言葉に反応したレオンだったが、

「所で魔法使いはいないのか？、やけに美人だという話だが？」

「ここにいますよ！」

カノンは人だかりを飛び越えて、一番前面にすとんと飛び降りる。

そこで、戦士が少し殺氣立つ。

「魔物……か？」

「ハーフです。所で僕は途中からですので何があつたのか教えていただけますか？」

「そこの勇者が打ちの僧侶をナンパしたんだ」

「ごめんなさい。跡でたつぱり言い聞かせておきますので、許していただけないかなと……」

「許せるか！見ろ、僧侶の奴が怖がっているじゃないか！」

指差す先には白装束を纏つた、くすんだ銀髪の少年が、彼らの勇者の後ろで顔を赤くしてレオンを見ている。

その子は、カノンと田が合ひうとときつと睨みつけて、俯いた。

これはひょっとして？。

「……もしや、僧侶の方はレオンに一目ぼれを……」

「するわけが無いだろ？！　あいつが大人しいからって好き放題やつて……」

「レオン、あの子に何やつた？」

「それにレオンが困つたように、

「いや、道を聞かれただけだが……」

「よくそんな嘘を！」

憤る戦士を、そこで勇者ホーリィロウが宥めた。

「まあまあ落ち着いて。僕達だって鬼じやない。その償いをしてもらえばいいさ」

「償い……なるほど、そちらが本来の目的ですか」

「人聞きが悪いな。僕は君に仲間になつて欲しいのに」

そう、ホーリィロウがカノンに手を伸ばす。それを人影が遮る。

「レオン?」

「……カノンは俺の“幼馴染”で仲間です。貴方にお渡し出来ません」

「君はそうかもしだれないので、カノン君か、彼はもしかしたならこっちが良いかもしないよ?」

「お断りします」

カノンは、ホーリィロウを見て即座に言い切つた。

それに、レオンはちょっと驚いたような顔をして微笑んだ。

対するホーリィロウは相変わらず不気味なほどにこじやかなままだ。

「これで話は終わりです。それでは……」

そういうてカノンの肩に手を回して背を向けるレオン。

肩に手を回された時、必然的にレオンにくつつくような形になり、レオンの体温を少し感じてカノンはどきりとした。

そこで、カノンの腕が引っ張られる。

「僕に触るな!」

とつにカノンは振り払つた。目がホーリィロウと合つ。

その瞳に宿る不穏な気配に、自然とカノンも挑戦するような好戦的な気配を瞳に宿す。

「……やつぱり君はそういう顔の方が綺麗だね」

「お褒め頂ありがとうございます。それでは僕は失礼します」

「でも、僕達に喧嘩を売つて、ただで済むと思つていいのかい?」

「そちらが仕掛けてきたのでしょうか?」

「さて、何の事だか。……けれど、僕たちが本気を出せばどうなるか分かっているでしょう? レオン様?」

名前を呼ばれて、レオンが立ち止まり振り返つて睨みつける。

「……それで、俺達にどうしろと？」

「カノン君を賭けてゲームをしないかい？」

「生憎だが、カノンを商品にするつもりは無い。カノンは物では無いし」

レオンが問題外だと言い切る。少し怒っているようだ。

でも、こういう時の顔をカノンは今まで見たことがなかった。思いのほかしつかりしているというか、頼りになるというか……。こんな顔で口説かれたら、誰でも一発で落ちるだろう。

本当にレオンは残念だよなど、人事のようにカノンは思った。そして、カノンの事を物じやないからとかまったく、だが本当に仲間思いなレオンにカノンもほんの少しだけ手助けしたくなる。

きっと、ここで敵対するのはレオンにとつても良くないだろう。だから、

「いいよ、僕が相手になつてやる」

「カノン！」

レオンが慌てたように叫ぶ。そして、イオも、

「カノンちゃん、考え方直したほうが良い。あいつらの仕掛けてくるゲームつてカードゲームなんだけど、今まで殆ど負けたことが無いんだ」

「ふーん。カードゲーム、ね。イカサマしているって事？」

「それは俺を侮辱しているのか？。そんな事せずとも光の神の加護を受けている僕達には、そんなものは必要ない」

そう自信満々に言い切るホーリィロウにカノンはふふと笑った。それに、カノンは不敵に笑い返す。

「イカサマを見つけたら、貴方の負けですよ？」

「余裕だね。それだけ自信があるのかな？」

「ええ、もちろん」

カノンと心配そうな、イオとレオン。そこでトランが、

「カノンが大丈夫だといつているんだ。何か考えがあるのだろう。今まで旅をしていて、言ったことだけは必ずやる奴だと俺は知つて

いる」

その言葉に、イオとレオンが黙る。

「話はまとまつたかな？」

微笑みかけるホーリィロウ。

そんな彼がカノンには滑稽で仕方が無い。

今自分が相手にしているのは誰だと思っているのだ？。

シリーズは歩いてくるへ（一）（後書き）

読んでいただきありがとうございました。
あと一回今日は更新できるかな？

シリアルズは歩いてくる？（2）

「うーん、困ったね。イカサマしたのに負けちゃった」
ホーリィロウが全然困つていないように頬をかく。深刻そうな雰囲気は一切見て取れない。

ちなみに彼の目の前に座っているカノンは、肩透かしを食いつていた。

「……普通に屈折を利用して全てのカードを見ているだけですか？」
「じゃあ君ならどうする？」

楽しそうに聞いてくるホーリィロウに、カノンは笑つて肩をすくめる。

「全部同じ柄のカードで神経衰弱、加えて僕が先行かな？」

「……それはゲームにならないよ？」

「僕は安定志向なんです」

仕方ないな、とホーリィロウは微笑んでレオンを見た。

「カノン君は君達のものだよ。今回は僕の負けだね」

「……こういった事はやめて欲しい。特にカノンに……」

「いや、凄く魅力的だからね。“幼馴染”だつたっけ

ふふと獲物を狙うような目でカノンを見た。

そんなカノンをやらないぞというようにレオンは後ろから抱きしめる。

そんな二人の心情などカノンは全然気付かず、本当にレオンは仲間思いだなと思っていた。

二人はカノンの心中など知らず、レオンはホーリィロウを睨みつけて、

「それより、もう金輪際近づくな。でないと悪評立ててやる

「いや、僧侶を惚れさせた君が悪いだろ。戦士は僧侶の事が片思いなのに」

さらつとホーリィロウがばらして、戦士が噴出した。

「ホーリイロウ様、何故ばらすのですか？」

「いや、レオンに僧侶が一目惚れするとは思わなくて。戦士がレオンに下手に突つかかられても困るし」

「しかし……」

「……いいね」

ぴりりとした殺気が放たれて、戦士が黙る。

その殺気にカノンは酷く反応してしまったが必死で抑えた。

今すぐ狩るか、といった衝動があるものの、レオンに後ろから抱きすくめられる力を強くされて、無理、と思つた。

なんだろう、レオンが触れているだけでカノンはどうぞとする。

それを悟られる方が怖い。と、

「まったくカノンがいるから、お金の管理しなくて楽なんだから、やらない

「それが理由か！」

下からパンチを繰り出すも、それをレオンは容易に避ける。

「ははは、遅い、遅いぞ！」

「ぐ、着々と逃げる能力だけ上がってる。だが……」

カノンは暗く笑つた。

まさかそんなどうでも良い理由で引き止められているとは思わなかつた。

がんばった……いや、それほどがんばったわけではないが、そんな自分が馬鹿みたいだ。

だから、憂さ晴らしさせてもらおう。

「いいだろう、その腐った性根を根本から叩きなおしてやるー！」

そう、土煙を上げつつものすごい速度でカノンはレオンを追いかけていったのだった。

後に残つた、イオとトランの一人はそれを見送つて。

それからくるりとその有名な勇者ご一行にイオは言つた。

「ついでですので、その酒樽を一つ譲つていただけませんか？」

「はー、美人な気がする、そこのお姉さんで……」

「あらん、わ・た・しの事?」

後ろから見た時には分からなかつたが、振り向いた顔は、明らかに男で、美形で無くて、女装しているのはまだ許せるとして、全体からかもし出される雰囲気も含めてレオンは本能的に感じた。

こいつは攻めだと。

「チヨ、チヨンジで……」

「ふふふふ、最近ここいら辺を騒がせている美形の変態勇者さんが引つかつたわ。お持ち帰り~」

「やめ、俺は受けじやない!」

しかしすぐにそのお姉さんのようなお兄さんの肩に担がれてしまう。

「大丈夫、誰もが初めはそう言つたのよー。すぐに可愛がつてあげるわねー」

「……何故に女言葉」

「馬鹿が引っかかるからよ、うふ」

「いやー、あ、カノン助けて……」

雨の中の子犬のような目で、カノンに助けを求められるが、カノンはにこやかに手を振つた。

「ザマーミロ」

「ひ、酷いつて……カノンに手を出したら許さないぞ?」

そこで、お姉さんのようなお兄さんがカノンをレオンとは違う方の肩に担ぎ上げる。

敵意が無いの油断したカノンはじたばたと暴れる。

「ちょ、何で僕まで担がれて……」

「あー、物騒なmonicに手を添えないでね勇者様。心配しなくても依頼が有つて……俺はギルドの者だよ」

と、そのお姉さんのようなお兄さんは告げたのだった。

ギルドは、一言で説明すると依頼を受ける場所である。元々キノ

「の魔物を倒したので、依頼達成としてお金を貰いに行く必要が力ノンには有つたので手間が省けた。

簡素な応接間に通されて、香りの良い紅茶が出された。

「最近、美人さん達が攫われる事件が多発していてね。あの格好で引っかかるいかと試していたのだ」

「……心臓に悪いのでやめてください」

「実は結構君、タイプなんだよね」

レオンがカノンの後ろに隠れた。それはいいとして、

「それで僕達に何を？」

「ああ、魔王の配下、四天王が一人風の王が住まう城があるのだが、そこにいる美人さんを帰して欲しいんだ。一応勇者だし、この位だつたら、かの魔族に相手してもらえると思うんだ」

「生きて帰つてこられるレベルだから、ですか」

「評判は散々だが君達のレベルは中々のものだよ。そうすれば、人買いの方の対処に専念できる。本当にここは小さな町なので人手不足なんだ」

はあと溜息をつくお姉さんのようなお兄さんにカノンは頷いた。

「僕達でよければ、ぜひ依頼を受けさせてください」

「助かるよ、依頼料はこれくらいで？」

提示された金額も、中々良い。といつも凄くいい。これで当分宿代と食費に困らない。

神様ありがとうとカノンは思った。

ちなみにカノンは魔王である。

「……本当に俺達のレベルでどうにかなるのか？」

レオンが珍しく、真剣な表情で聞き返す。

お姉さんのようなお兄さんは、数回目を瞬かせて、意味深に笑つた。

「……大丈夫ですよ。貴方方なら」

「カノン、依頼を断ろう。止めた方がいい」

それにカノンは必死になつて首をふる。せつかくのチャンスなの

だ。こんな機会めったに無い。

「嫌だよ、お財布係の僕は、見過ぎせないよ」

「いいから止める」

「何で急にそんな……僕は受けれるよ。ここにサインすればいいんだね」

とレオンの反対を押し切つて、サインしてしまつ。

「はい、契約成立ですね。もし破ると違約金がかかるので、注意してください」

「…………わかった」

レオンが珍しく溜息をつく。

けれど、これはカノンにとって渡りに船なのだ。だから、逃すわけにはいかなかつた。

「カノンちゃん、レオンもお帰り。お酒分けてもらつて、作つている最中だよ」

「…………イオ、一つ聞いてもいい？」

「なあにー」

「…………僕が夢を見ているのかな、樽の半分ぐらいまでお酒が減つているんだけど」

「夢じゃないよー。わざわざトランと飲み比べして、僕が勝つたからねー」

「商品に手を出しちびつするんだ……そういうえば一人がお酒大好きなの忘れてた。はあ、原料だけだと買い叩かれるんだよな……でも他に代わりが無いから、いけるか？」

そう、キノコの山を見詰めてカノンが嘆くと、イオが唐突にカノンに襲い掛かつた。

「酒は飲めども飲まれるな……てね」

「や、ちょっと樽ごとは…………らめえ

カノンは樽に放り込まれた。ざぶんと酒が飛び散る。これでもう酒は使えない。そもそも、

「大丈夫か、カノン？」

笑い転げるイオを尻目に、レオンが様子を見ると、酒に漬かつたカノンがレオンを見上げた。

その顔には妖艶な笑みが浮かんでおり、レオンは目を離せなくなる。

次の瞬間、カノンがレオンに手を伸ばして自身に引き寄せてキスをした。

突然の事に慌ててレオンは逃げようとするもカノンは放さない。何度もちゅっちゅと唇が触れて、レオンは自分の体に力がはいらないなくなる。

そしてそのままぐらりと倒れこみ、レオンは意識を失う。それを見届けたカノンはくすりと笑い、唇を舐める。

「ごちそうさま」

そういうつにも増して色香を漂わせながら、カノンは倒れこんだのだった。

ちなみに事の顛末は、酒に全員が酔っていたため記憶に無い。

また、次の日、カノンが何故酒を飲ませた、酒は苦手って言ったのにー、トイオを責めたのは言つまでも無い。

シリーズは歩いてくるへ（2）（後書き）

お気に入り、評価ありがとうございます。とても励みになります。

次回更新は未定ですが、よろしくお願いいたします。

本人だけが気づかない

翌日の事。

「嘘だ！ そんなの絶対に嘘だ！」

「嘘じゃない。カノンが自分からキスを迫つてきて、『ひ……』

「…………（言葉になら無い悲鳴）」

先ほど田を覚ましたカノンは、一田酔いの頭痛を感じながら起き上がつて、部屋の惨状を目の当たりにした。

倒れているイオ、トラン、レオン。そして樽に下半身を突っ込んで転がっている自分。

どうしてこうなった。

「ええっと、確か戻つてきたら、イオとトランが酒を半分ほど消費していく、それで作つてたといつていたんだよね」

そうカノンはちらりとキノコの山を見る。減つた気配が全然無い。後で素材だけでも売るかと溜息をつく。

そもそも前からお酒は弱いのだとカノンは皆に言つていたはずなのに。普段イオはいい奴なのに、何故こうも酒癖が悪いんだ？

そこで、レオンが目を覚ましたから。

そういえば、どうしてレオンが倒れているんだ？。

理由はすぐに分かつた。

「ない、ないから。そんな事……」

酔つた勢いとはいえ自分からキスするなど……何故覚えていなかつた自分、とカノンは思つて、覚えていたならどうなのだと疑問に思つ。自分の気持ちが良く分からない。

いや、それよりもレオンはどう思つて居るのだろう。まさかキスなんて。

別に何かの答えを期待しているわけではない。……多分。

なので、試しに聞いてみると、

「カノンの柔らかくて温かい唇がいい、俺の唇に……」

「やーめーるー」

あまりのも生々しく聞こえて、カノンはがくがくとレオンの襟元を握り締めて揺らすも、レオンは笑つたままだ。

「いや、でもまさかカノンに襲われるなんて思わなかつた

「事故だ、不幸な事故だつたんだ」

「だよな、俺もカノンは大切な“幼馴染”だからそういう対象に見れないし」

その言葉に、カノンは何故か大きな衝撃を受けた。

いや、確かに“幼馴染”だし仲間だから仕方ないというか、当たり前だが……。

まるで自分が何かを期待しているみたいではないか。

そう考えた途端、カノンは、はうと思つた。

無い、これは無い。無い、絶対無いから。無い……でも本当に?。

そこでレオンがやけに上機嫌に、

「そういえば俺のファーストキスはカノンなんだよな

「なん……だと?」

「昔やつただろ? そりか……覚えていないか

ちなみに魔王であるカノンのファーストキスは、百歳以上年の離れた子供に奪われずみである。いや、確かにあの時子供に化けてはいたのだが……。

お嫁さんになつてよとその後言われて、あの時は慌てて逃げ出した。

何分子供の言つ事。そんなに大げさに受け止める必要はなかつたのに。

そういえばあの子供も、金髪に空色の瞳をしていたとカノンは思い出す。

すごい偶然だ。

「いや、まさかカノンがそんな風に思つているなんて気付かなかつたよ! カモーン、ベイベ」

「……実家に帰らせていただきます」

「あ、嘘です。『冗談です……』」

引き止めるレオンに、僕も『冗談ですよ』と笑いかける。まだ目的も果たしていないのに、帰るわけないのだから。

ギルドから依頼を受けた内容をカノンは説明した。

「よし、装備を整えに行こう！」

何故かテンションを高めるレオンに、カノンはジト目でレオンを見た。

「……どうやって？」

「さて、あのキノコでも売るか」

そうやって幾らかお金を得たものの、それも回復の魔法薬代で消費した。

そして、四天王の魔族に攫われるという場所に来たわけだが。

「『美男求む！』人、魔族は問いません。ここから20km『えつと時給は、30リン……これ、魔物倒すより儲かる？』

「やはりここで普通に働いたほうが生活が……」

「カノンちゃん、カノンちゃん。レオンが本気で働くつか迷つているから止めて」

「うう……この時給……」

「ああ、カノンちゃんまでが大変な事に。トラン！」

「いいんじゃないか？」

「ぐ、魔物嫌いのトランまで……金か、やつぱり世の中金なのか！」

たしかにこれだけあれば、自分も含めて四人でこれで二つで、しかも宿代がかからなくて……て、違う。そうじゃない！。

「レオン、君は勇者として構えていればいい」

危なくカノンは本来の目的を忘れる所だった。

その言葉に、レオンがカノンに抱きついた。

「本当にカノンみたいな“幼馴染”がいて良かつた」

「レオン……」

そんなレオンを見て、カノンは罪悪感のようなものを抱く。

利用しているだけなのに、レオンがこんなに嬉しそうだから困るのだ。

本当に困る。

そこで、馬のような魔物に引かれた馬車がやつてくる。それはレオン達の前に止った。

「……勇者御一行ですか？」

その馬を操る人型の魔物が無表情に問いかけた。魔物特有の角張った耳に、金色の瞳が揺れている。

「そうだと言つたらどうする？」

「そういう挑戦する方々も、運ぶように仰せつかっております」

その言葉にレオン達は顔を見合せたのだった。

本人だけが気づかない（後書き）

お気に入り、評価ありがとうございます。とても励みになります。

今日は何回更新できるか不明ですが、よろしくお願ひします。

居心地の良い場所を離れよ

石造りの聳え立つ城。窓からは人影……否、魔族だらう、が見え隠れする。

「それでは私はこれで」

そう馬車で送つてくれた魔族は一礼して去つていく。
罵かもしれないと警戒していたレオン達だが、そんな事はなくここまで連れて来られた。

そして、現在大きな城門の前に立ち止まつていてる。理由は、「さつきから何度も押しているんだが、一向に開かないんだよな」全員で扉を押していたのだが、一向に開く気配が無い。
困つてちょっと下がつて扉を見ていると、扉がゆっくりと開き始めた。

そこには執事服を着た魔族が困つた顔でこちらを見ている。
「この扉は、外側に開くように設定されていますので、押されても開かないのです」

「すみません」

何故か謝つてしまふレオン達。そして中を案内されるも、人らしい給仕もちょくちょく見かける。

全員、美形の男だが。

それは良いとして、どういうわけか一室に通される。

「ただいま」主人様は忙しいので明日までこの部屋でおくつろぎください

「……えつと、俺らは勇者で……」

「存じています。他に何かございましたら、備え付けのベルを鳴らしてください」

そういうて去つていく案内人の魔族。

高級な感じの宿というか何というか。カノンは首をかしげる。

それにダブルベッドが一つしか無いとか、何かがおかしい気がす

る。

加えて、ここで待つていてくれと部屋に案内される事自体がおかしい。そもそも自分達は勇者で敵なのに？。

「どうしようか…… そうか、家捜しを！」

と、レオンが言つた瞬間再び先ほどの案内人が顔を出し、「もし、調度品を壊すようなことがありましたら、それ相応の代金を払つていただか、体で償つて頂きますので、『ご』承ください」

事務的に告げる魔族。それに、レオンが反応した。

「あ、はい、分かりました。所で、体で償つて貰うというのは？」
「東の城壁が最近崩れかけていますのでそちらの補修です、それが何か？」

「ですよねー」

そのまま去つていく魔族の案内人。とりあえずカノンは一発レオンを殴つておくかどうか悩む。

どうしていつもいつもいつも、そういう発想に結びつけるのだろう…… はあ。

「と、いう事はだ。これから魔族の兄ちゃん姉ちゃんをナンパに行つてもいいってことか？」

「……下手すると、物理的な意味で喰われるよ？」

頭が痛くなりながらもカノンはそう忠告する。

もつとも、高位の魔族……特に知能の発達した魔族は確かに人間を喰う事が出来るが、基本的に性交渉で魔力を食らうことが多い。その方が、捕まる手間が省けるからだ。

ようするに、キスしまくりというけしからん話なんだよな、とカノンは心の中で呟く。

もつとも満月の夜といった魔物の衝動が強く出た時はその限りではないが。

一応魔族同士でも魔力を喰らう事はできるのだが、闇と光という相反する者同士、お互に求め合つ傾向が強かつたりする。
さて、それは良いとして。

「大丈夫だつて。知能のある奴は、見境なく襲つてこないし、といふわけで俺は行く！」

ぐ、余計な知識だけ増やしやがつて、とカノンは心の中で毒づく。そして意気揚々と駆け出したレオンに向つて、カノンは杖を振り上げて、電撃の魔法を使おうとして、外れたら弁償といつ言葉が浮かび慌てて魔法を使うのをやめる。

その僅かな時間差で完全に後れを取り、カノンはレオンを見失つてしまふ。

「……良いだらう、この僕を甘く見たことを後悔させてやる！ イオ、トランは留守番よろしく！」

任せてー、ヒイオが答えるのを尻目にカノンは走り始めたのだった。

レオンだつて実は考えていたりする。

「さてと、この城の内部構造をある程度知つておいて、こざという時の脱出経路を決めておかないと」

そもそもこの依頼、何かがおかしいのだ。何か別の目的がある気がする。

それに、この前会つたあいつもカノンの事を欲しげって言つていた。

確かにカノンは可愛くて綺麗で魅力的だが、それだけで選ぶような奴ではなかつた……はず。

いや、でもカノン、本当に可愛いし。それもありえる、か？。だが、計算高いあいつの事だ。それだけのはずが無い。わざと負けたのも何かの布石か？。

魔法の明かりが灯るであるうつ窪みは、目印になりそうに無い。窓も同様。

本当に構造がとても単純で分かりやすい。もつと入り組んでいるものだと思ったが、そんな事は無い。

そして途中から部屋を覗くのを止める。

先ほどから同じような客間にばかり。階を下ると厨房があり、そこにいた魔族とおじさんが汚れたままここに入つてくるなとレオンは怒られた。

大体分かったの、上の階を目指す事にする。
そういえば偉い奴つて上のほうに住んでるよねと思うも、そこからは人間にも会う。それはそれは美形の。
とりあえず、ナンパしているふりをしつつ、そこら中を駆けて、人や魔族の気配がなくなる。
この場所に違和感をレオンが感じていると、通路の一角に一人の魔族が待ち構えていた。

黒髪に金色の瞳。

年若く見える魔族だが、そもそも人間と魔族の年齢を一緒に考えてはいけない。

幼い姿でも、ジジイだつたりババアだつたりするのだから。見た目の感じから、レオンと同い年のように見えるが。彼はにこやかに友好的な笑みを浮かべてレオンに言った。

「一発殴つていいかな？」

居心地の良い場所を離れよ（後書き）

お気に入り、評価ありがと「ひー」れこます。とても励みになります。
別の話も書きたいけれど、なんか、今すい話が思い浮かぶ。

振り返れば奴がいない

「お断りします！ 痛いのは嫌です！」

レオンは言つも、拳を握り締めて繰り出してくるその魔族を素手で受ける。両手を押さえて、ぎぎぎと力比べをする。

それを見て更にその魔族は苛立つたように、

「嫌だといって止める奴がいると思うか！ さつさと抵抗を止めろ！」

だからといって大人しくやられる奴はいない。加えて、相手はレオンだった。

「無理矢理はいけないと思います！」

「何の話だ！」

「卑猥な話です！」

「更に悪い！ 気持ち悪い事を抜かすな！」

としばらくぎやあぎやあ話して、一人はその状態のまま黙る。

その沈黙を破つたのはレオンが先だった。

「……何故俺が殴られなければならないのですか？ だって初対面ですよ？」

その問いかけに、ふんとその魔族は見下したように笑つて、
「分からぬのか？ 自分がどれほど酷い仕打ちを私にしているのかを！」

「えつと、初対面ですよ」

「初対面だ。だが、お前の事は話を聞いて知つてゐる。情報収集は基本だからな」

「はあ、それで、どのような理由で？」

それに深々とその魔族はため息をついて、それから、

「……お前と私はキャラがかぶつてゐるんだ」

「…………（ - ． ． ． ）」

「そんな顔をするな！ こつちは死活問題なんだ！」

「いや…… そうか、うん。でも別にそれほど迷惑かけて無いんじゃ

……」

「一見そう見えるだろ？ でもだな、アピールポイントって大事なんだ」

レオンは、はつと思い当たる。

「まさか…… お前もカノンを……」

「呼び捨て…… 呼び捨てだと？ 死ね！」

怖ろしい程の魔力と殺氣に、レオンは命の危険すら感じて、けれど戦おうと剣に手をかけるが、

「レオン！ こんな所に居た！」

そんなカノンの声に、レオンが来るなと叫ぼうとして、どうしてか魔族の殺気が瞬時に治まる。

よく見ると、田の前の魔族が顔を真つ赤にしてカノンを凝視している。

そしてカノンの目がその魔族を捕らえた途端、その魔族は脱兎の「」とくカノンと反対方向に逃げ出した。

それを呆然と、見送ったカノンはポツリと呟く。

「僕はそんなに怖いのか？」

「いや、カノンがモテモテなだけだと思つ」

「は？」

間の抜けた声をあげるカノンに、レオンは苦笑する。

本当にカノンは自分がどういつ風に見られているのか分かっていないから困る。

その方が、レオンには都合が良いといえれば良いのだが。

「…… あいつか」

当のカノンはといえばじつと、先ほどの魔族の逃げていった方向を見ている。

それが何処となく深刻そうで、レオンはチャンスとばかりに駆け出そうとして、カノンに足を引っ掛けられた。

「レーオーン。逃げられると、本つつ氣で思つたの？」

「えつと、もしかして怒つてしますでしょうか？」

「これから寝るまでお説教タイムだ。素敵な子守唄だりうっ。」

「いーやー。」

誰もいない廊下に、レオンの悲鳴がこだましたのだつた。

「うへ、いやだ。お説教は……むにゅむにゅ」「
しゃしゃくと泣いたように寝顔を砾くレオン。

ちよつと言い過ぎたかな、と起き上がってカノンはレオンを見る
が、その無防備な寝顔に体の血が騒ぐ。

美味しそう。

「……いや、駄目だから。とこつか、眞間のあれ見ておいしそうと
か無いから」

そう自分にカノンは言い聞かせる。

現在深夜二時を回つた所。ダブルベットなので、カノンはレオン
と寝ていた。

「うん、カノンちゃんはレオンとだね！」

イオと一緒に寝ようと言つたらそう言われてそうなつてしまつた。
お互ひ右端と左端に眠つてゐるから、別にどうといつことも無い。
無いはずなのに、じきじきしてカノンは眠れない。

そんな折に、魔力を感じた。それを読み取つて、カノンはレオン
達に見せた事の無い冷たい表情になる。

「招待されたのだから、いくとしよう」

そう呴いて、レオン達を起こさないよつこいつそつとベッドを抜
け出す。

そんなカノンが部屋を出てすぐに、レオンがまぶたを開いた事な
ど気つきもしなかつたのだった。

欠けた月の青白い光が降り注ぐ庭園。

そこに昼間レオンとやり合つていた魔族が立つてゐた。

強い魔族らしい……何処か高貴で、自信に溢れる特別な者。その美しさに普通ならば見惚れてしまうだろう。だが、

「それで、僕をこんな所に呼び出してどういうつもりだ？」

「少しお話をさせて頂きたかっただけです。魔王様」

その言葉に、カノンの目がすっと細くなる。

「……武器や魔族の兵の準備等をしているかみたが……」

「ありましたか？」

「非常に上手く偽装されていた」

「ばれてしましましたか。さすがは魔王様、といった所でしょうか」

「あっさりと認めてしまった魔族に、カノンは冷たく告げる。

「逆らうつもりか？　この僕に」

その問いかけに、怯える所かむしろその魔族は笑みを深くして、

「……本当は興味が無かったのです。僕はまだ名前を襲名してないのですが、父が貴方の父君に懸想をしていた事もあり、準備をしていたのですが……気が変わりました」

「それで、逆らうつもりか？」

「……貴方を追い落とすつもりはありません」

「信用しようと？」

「逆らうつもりならば、とつぐの昔に貴方の大切な勇者達と共に葬つていますよ？」

そう、何処かおかしそうに残酷な事を口にする魔族。

確かに言われたとおりだが、レオン達が殺されると聞いてカノン

の中から殺氣が湧き出てくる。

そこで彼は、笑うのを止めて真剣な表情になつた。

「そんなに勇者達といった人……光がいいですか？。同胞の闇ではなく？」

「何の話だ？」

意味が分からぬと思い、聞き返す魔王を彼はじつと見て、ふう

つとため息を付いた。

「分かりました。僕にもまだ、可能性は残されているという事です

ね。所で魔王様、僕はまだ名前を襲名していないので、リンツとお
よび下さい」

「……リンツ、か。分かった、覚えておこう」

「それでは、今日ですね、勇者達と茶番をいたす事にしましょう
「……そういえば脇間、やけにレオンに突つかかっていたがどうい
うことだ?」

「似たもの同士なので衝突した、それだけです

「そういうものなのか?」

「そういうものです。それでは失礼させていただきます、魔王様」
と、去ろうとするリンツ。けれどすれ違いざまに魔王の頬にキス
をする。

「な?」

「本当に可愛らしいですね、魔王様」

何処か楽しそうに笑いながらリンツは去っていく。

カノンは、リンツの触れた頬に手を当てる。

まだ感触が残っている。何なのだこれはと、人よりも長い時を生
きたカノンは思つたのだった。

「あれ、君、いたの?」

知つていたくせにとレオンは舌打ちする。そして牽制も忘れない。

「カノンに手を出すな」

「まだ君のものでは無いでしょ?」

冷たい火花が散つて、けれどレオンのほうが先にきびすを返す。

カノンが戻る前にベッドにいなければならぬ。と、

「君もほどほどにした方がいいよ?」

そう忠告されてレオンはふりかえると、そこにはもう誰もいなか
つた。

それを見て、もつと強くならなければとレオンは心の中で思つた
のだった。

振り返れば奴がいない（後書き）

お気に入り、評価ありがとうございます。とても励みになります。

あと一回更新できるか？

考えるな、感じるんだ

「主人がお待ちです」

二回ノックされてから、案内人の魔族が顔を出した。

因みに、現在、ステーキ肉（カノンの分。カノンは果物しか食べないことになっている）の争奪戦が三人の間で行われていた。

「肉、肉を寄せせ

！」

「ふ、いくら我らが勇者様レオンといえど、肉は渡さない！」

「肉、肉、肉、肉」

飛び交う矢に短剣に剣撃 + 魔法。

とりあえずカノンは結界を張つてその中から三人が出られないようにする。

正確には壊したり汚したりしないようにしたわけだが。

「なんでこんなに醜い争いを……」

カノンはそう呟かずにはいられない。

食事というものは、あれほど仲の良かつた仲間をかくも……いや、

世の中弱肉強食だし仕方がない、のか？。

そして案内人も案内人である。

その惨状を見ても顔色ひとつ変えない。よく訓練されている。

「ご主人がお待ちです」

再度、案内人が告げると、三人が争うのをようやく止めた。それ

を見計らつて疲れたようにカノンは三人に告げた。

「……三等分して三人で分ければ良いのでは？」

その言葉に、三人は顔を見合わせたのだった。

「はつはつはつは、よく来たな汚れた勇者よ！」

色々な所から角のようなものが生えたお面をかぶつた変な生き物が一人大きな部屋で待っていた。

レオンは声から昨日会った魔族と推察する。が、

「……なんで俺が汚れているんだ？」

「何で僕を見るんだ。僕が知るわけ無いだろ？」

小声で言つたのに、何故か彼まで届いたよつて、

あ
ガ
ノ
ン
様
の
事
を
ま
た
呼
び
捨
て
に
し
た
？
！

「うう、『ミヅシ』。」（ホン一行）

「ああ、沈黙が痛い、ひりひりしたやべ！」

「あいひ、なんだろひ……レオシと同じ臭いがする」

イオが、とてもとても深刻そうに顔を真っ青にして告げた。それ

にレオンは顔をしかめて、

「失礼な！ 俺はあんな変な奴じゃなし、なんだその世間！ そん

な風で俺を見るなー」「わーんと嘔泣きする

無いわーと三人で呟いた。と、

「聞こえていいぞそこ」——誰が変な奴だ！　私は強いんだぞ——」

大丈夫じゃない答えを叫ぶその魔族に、全員でふうっとため息を

付いてから、レオンが一応主役なのでその魔族に言った。

取り合えずそこの不細工、俺が勇者レオンだ。連れて行った美形

「不謹！」今不謹つて書つたが、

そこで被り物を、頭から抜いた。中から出てきたのはやはり昨日

の魔族。

彼は自分を指差して、

「これが私のハンサム顔だ！」不細工など断じて無い」

漆黒の黒髪に金色の瞳。確かに美形である。きらりと光り輝く白

いぬかいわ。

「ふ、二の俺のイケメンな俺に勝てるかな！」
「たが、それ以外は、も張り合ひ、変な奴がもう二人

きらりとレオンも歯を光らせる。

それを見てカノンは頭痛がした。そしてすぐ傍に先ほど案内して

くれた魔族が残っている事に気づく。

試しに聞いてみた。

「……どうしてあんなになるまで放つておいたんですか？」

「いちいち考えますと、疲れますよ」

顔色一つ変えない。よく出来た魔族だとカノンは思つた。
そして、似たもの同士の戦いは更にヒートアップする。

「自分でイケメンといつていて恥ずかしくないのか、この変態勇者が！」

「自分こそハンサムとか自分の事を言つて、恥ずかしくないのか！」

「この変態魔族」

「黙れ、バーカ」

「馬鹿つて言つた奴が馬鹿なんだからな！」

口喧嘩のレベルが子供の喧嘩レベルになつていく。

どうするんだよこれとカノンは思つた。そこで、

「そもそも人間の美形ばかり攫つてどう使用つて言つんだ！ 嘘うのか！」

「下品なやつめ！ 美しいものはただ愛で、鑑賞するものだ！ 触れるものでは断じて無い！」

「はん、本当か？ だったら今すぐそいつ等を呼んで来い！」

「良いだろ、君達、来るんだ！」

ぱちんと指を鳴らすと、転送されてくる銀髪美少年が沢山。

「ふふふ、私の美しさを引き立てるのに彼らは素晴らしいのか？」穢れた勇者よ

「きやー、リンツ様素敵！」

一斉に褒め称える少年達。

いい加減力ノンは頭が痛くなつてきた。こんなのが魔王の次に強い魔族？。これが？。

もう泣いていいかな、これ。

そこで珍しくきりつとした顔でレオンが問いかける。

「何故、銀髪美少年ばかりなんだ？」

「決まつていい、カノン様が銀髪だからだ！」

嫌な沈黙が支配した。視線がカノンに集中する。

その視線がリンクを讃える少年達からの嫉妬の視線が多数混ざっている事にカノンは気付く。なので、

「……気持ちが悪い。戦略的撤退をします」

ぐるつとその場から立ち去るつとするカノンに、焦つたようなりンツが、

「ま、待つてください、カノン様一つ。どうか良いのですか？」

任務遂行できませんでしたという事で

「……分かつた。もう少し話を聞こう」

生きていくつて本当に大変だとカノンは思った。そこで、

「ふ、男としての魅力で引き止めたと……ああ、すみません調子に乗りました、許してください」

仕方が無いので、カノンは静観する事にした。

そして、再びリンクはレオンへと向き直り、上半身の衣服を脱ぎはじめた。

脱いだその上半身は、意外に筋肉質で着やせするタイプであるらしい。

そして腕を曲げて、力瘤を作つてみせる。

「ふふふ、勇者よ、お前のような優男に、このようなものは出来まい。私も日々トレーニングを重ねてようやくこうなつたのだから！」魔族なんだから体鍛えるより魔法の研究しろよとカノンは思った。そもそもどんなに体を鍛えようと、魔法で一発だらう……剣使うわけじゃないんだから。今だつて装備していないじゃないか。

しかし、それに呼応するかのようにレオンが不敵に笑い、

「ふ、その程度で筋肉自慢とは！ 恥かしくないのか！」

「貴様！ わが筋肉を愚弄する気か！」

「そんなの筋肉じゃない！ 鰐肉だ！」

「く……言わせておけば……良いだらう、そこまで言つのならばお

前の筋肉の力、試してやる！」

いつから筋肉の戦いになつた。カノンはいい加減頭痛を覚えるどころか、何も感じなくなつていた。

「勝負は腕相撲。三回勝負だ！」

「そうすればそこにある少年達を返してもうられるなー。」

「そこで少年達がブーイングつする。」

「ええー、ここのはうがいい生活できるのにー。」

「それに周りは美形達ばかりだし、リンツ様素敵だし、きやつ「それに給料が良いんですよー！」

とかなんとか。気持ちは分かる。気持ちは。

でもカノンは理性で考えるとそれは駄目なんじゃないかと思う。

そこで、

「……一回帰つてからまた来れば良いんじゃないか？」

レオンが珍しくもつともなことを言つ。が、

「えー、めんどくさいー。」

何だらか、イラッとする。そもそもなんでこちらが悪者のようになつてゐるんだ。その腐つた性根を叩きのめしてやりたい……これは年長者の務めだよな、近頃の若い者は本当に……。

「カノンちゃん、怖いからもつと穏やかに笑つて、ね？」

「イオ、僕はそんなに怖い顔をしている？」

「美人が台無しから、止めた方がいいよ。ね？」

カノンは笑みを消して無表情になつた。実はそれも結構怖かつたが、イオは黙つていた。

さつきの笑みよりはました。

「だが、そちらが負けたらカノン様を貰うー。」

「カノンは商品じゃない！」

「ふん、カノン様を商品にしないなら、私は勝負しないもんねー。」

そうそつぽを向くリンツ。仕方が無いので、レオンの傍に行つてカノンは袖を引っ張つた。

「レオン、僕を景品にして、

「でも……いいのか？」

「勝算は？」

そこで清々しい笑みをレオンは浮かべた。

「100%だ！」

「健闘を祈る！」

パシンと手をカノンとレオンは打つ。
その様子が気に入らないのか、リンツがその姿に似合わず、けつと呴いたのだった。

考えるな、感じるんだ（後書き）

お気に入り、評価ありがとうございます。とても励みになります。

後一話で一区切り……今日の更新は、無理、か？。

筋肉の力は偉大

「yo si、今こそ新技を試す時！」

そう叫んだかと思うと、レオンの上半身の衣類が弾け飛んだ。中から現れたのは、筋肉隆々となつたレオン。上半身だけ異様に発達したレオンだ。

ちなみに顔だけは元のままなので違和感しか感じない。だがそのあまりにも衝撃的な光景に、カノンも含めて誰もが言葉を失つた。

「じゃあ行つて来るから」

カノンに笑いかけて歩いていくレオンをカノンは引き止めた。

「カノン？」

「『カノン？』じゃない！ それ、そんな技……まさか、この前レベルアップした時に……」

「そうだ！ やっぱり男は筋肉だよな！」

そんな楽しそうなレオンを見て、カノンは泣きたくなつた。でも泣いてもどうにもならないので一先ず、

「その技、返品して来い」

「え、でも……」

「一週間以内で戦闘に未使用であれば返品できたはず」

何で人間というか敵の技の管理まで、魔王であるカノンがしないといけないのだ。というかそんな知識が必要になるなんて……。ため息ばかりがカノンの口から零れる。

が、レオンは首を横に振つて。

「え、嫌だよ。俺この技気に入つてているのに」

「レオンは弱いんだから、少しでも良い技を持つて、選択肢の幅を

……

「凄く素敵だと思わないか、この筋肉！」

きらきらと目を輝かせるレオン。可愛いよ、確かにそんなレオンは可愛いとカノンは思う。けれど、

「……分かつた」

「だる、この筋肉……」

そこで、カノンはレオンを杖で殴つた。

「ぐふつ」

そしてそれと同時にみるみる筋肉が消えていく。後には、レオン

がいつもの体型で氣絶して倒れる。

カノンが使つた業は、いち、にの、ポカーンで技を忘れさせる魔法だ。

これで再度新しい技が契約できるはず。

「まったくレオンは、悪ふざけが過ぎる……」

そうカノンは嘆息して、今はレオンをこのままにしても大丈夫だな、次はと、カノンはリンツに向き直つた。

その表情は、先ほどまでの困つたような穏やかな表情ではない。

それを見て、リンツを取り囲む少年達は言葉を失う。

それいに対しても、リンツは、へえ、と面白そうに笑つた。

「もしかしたなら、カノン様がお相手してくださるのですか？」

「ええ、僕が相手になりましょう」

そこで、襟首を掴まれて、カノンはずるずると壁際まで引きずられた。この感じはイオだなとカノンは氣付く。

そして、イオが怒つたようにカノンを見る。

「どうするの、カノンちゃん。レオンだつて、確かにふざけてあの業を選んだと思うけど、今必要な業でしょーーー！」

「……必要ないよ。だつて僕が勝つから」

そう言い切るカノンに、イオは何ともいえない顔をする。

そして、搾り出すように口を開いた、
「……もう少し僕達を信用してよ。力になりたいんだ。レオンは僕達よりもずっと信じて欲しいはずだよ？」

まさかそんな事を言われるとは思わなかつたので、カノンは本当に驚いた。そしてそれをそのまま顔に出した。

それを見て、更にイオが何か思つところがあるようにしかめる。だからカノンは精一杯の笑みを浮かべてイオに答えた。

「……ごめん。でも、ありがとう！」

それは本心からだつた。本当に心配されていることが分かつて、それは悪い気はしない。だから、精一杯自分にできることを彼らのためにしようとカノンは決めた。

一方イオは、その笑顔を見て反則だと思った。これでは怒れない。「じゃあ、僕、がんばるから」

そう小走りで、いつの間にか要された机にカノンは座る。目の前にはリンツがいる。

「上着は脱がなくていいのか？」

「ええ、かまいません」

そう答えつつ、合図があつて一回戦が始まる。そこで少年達がリンツに声援を送る。

「「がんばってリンツ様！」」

それにイオが対抗心を燃やす。

「よし、僕達も応援だ！　僕は踊る！」

「では俺は、笛を吹こう！」

ぴーひーと笛の音に合わせて、イオが踊る。それは確かに見るものを見つける踊りではあつたのだが、

「てい」

その油断をカノンは利用した。

第一回戦は、カノンの勝ちである。リンツはぶすつと頬をふくらませて、

「そこの人間、踊るな！」

「別にそちらも声援を送つてているのでは？」

面白い冗談ですねとこりとカノンは笑うと、リンツが、「じゃあ、お前達静かにしろ。これでそっちも止める」

気分を害したような少年達。それを見て、カノンはほんの少し溜飲が下がると同時に、皮肉を言いたくなる。

「残念ですね、イオの踊りは凄く魅力的なのですが」

「目障りだ」

きつぱりと言い切つたリンツ。そこで再び腕を組みなおす。

一回戦の合図がある。沈黙の中、拮抗する力、そこで、

「痛い！」

カノンが悲鳴を上げた。するとリンツが焦つたように力を抜く。だが、それがカノンの狙いだった。

「てい」

またしてもカノンの勝ち。よつて勇者達の勝利である。

「僕達の勝ちです」

えー、と少年達が言つてゐるが、カノンは聞こえないふりをした。カノンは、目の前のリンツに視線を戻す。その結末に、リンツは納得がいかないらしい。

そのすねた様な表情がレオンに似ていて、カノンはほんの少し笑つてしまつ。

そこでリンツが席を立つて、カノンのすぐ傍までやつてくる。

そしてカノンの顎を掴むと、自分の唇に重ねた。

「んつ……んんつ」

ちりりと唇を通して妙な感触を感じたが、カノンはそれどころではない。

と、襟首を掴まれて倒れこむように後ろに引きずられて、そのまま抱きかかえられる。

見上げるとレオンが居た。

ただ、いつもと違つて頼りない表情ではなくて、何というか……。

「……カノンに手を出さないでください」

「警告はしたよ？ 君に何が出来るんだい？」

「貴方には関係ありません」

そのまま、今度はカノンを抱き上げると、レオンはきびすを返す。

リンツも何も言わない。

レオンの様子がいつもと違うから、抱きかかえられたままカノンはレオンに恐る恐る声をかける。

「あ、あの、レオン？」

「ああ、そういうえばカノンが勝ったので、俺に君達もついてくれ。イオ、トラン、帰るぞ」

さつさとこの城から出たいといふかのよつて、そしてレオンはカノンと話すつもりはないらしい。

それが頭にきて、カノンは下ろせといつも、まったく聞く耳を持たない。

結局、宿に戻るまでカノンはレオンに口を聞いてもらえなかつた。

その広い広間に残つていたのはリンツ一人。

「さて、と。負けてしまつたが……手は打つた」

そう連絡を入れると、相手の三人は笑う。実際に会うとどうだつた、ときかれてリンツは答える。

「綺麗で、魅力的で、本当に今すぐ自分のものにしてしまつた」

そう答えると、彼らはそれは楽しみだと答える。

そして幾つか話してそして、会話を切る。

「カノンカース様、か」

リンツはその名を口の中でそつと転がして、美味しそうに飲み込んだのだった。

筋肉の力は偉大（後書き）

お気に入り、評価ありがとうございます。とても励みになります。
一区切りきました。次回更新は未定ですが、よろしくお願ひいた
します

困る質問No.1

宿に着いて、

「キス、何で黙つてされていたんだ？」

「いや、突然の事で……もしかして、レオン、それで怒つて？」

「……大切な”幼馴染”だからな」

本当はそれだけではない事をカノン以外は全員知つていたので、彼らから見ると修羅場のような状態である。

だが、当のカノンは嬉しそうだつた。

「そつか、心配してくれたんだ」

「……そうだ。まったく、キスなんかされて……」

カノンの雰囲気からどう考へてもレオンの怒つている意味を勘違
いしているらしい。それはそれで好感度upかとイオが分析してい
るど、

「そうだよね、百回キスすると子供が出来るしね！」

レオンが固まつて、それを聞いていたイオが噴出した。しかもそ
れだけでは笑いが収まらないらしくお腹を押されて床に転がつた。

「イオ……失礼だよ。僕はそんなにおかしい事を言つたつもりは
……レオン？」

真剣な表情でレオンはカノン両肩に手を置いて聞いた。

「カノン、いま自分が何を言つたか分かつていいのか？」

「え？だから、百回キスすると子供が出来るって」

それに今度はふいつと、レオンはイオ達の方に歩いていき、
「どうしよう……」

「いや、僕に言われてもね……」

「試しに子供がどうやって生まれてくるか聞いてみたりびつだ？」

「トラン、いいアイデアだ」

そこで不思議そこにこちらを見ているカノンに、レオンは聞いて
みる。

「カノン、子供がどうやって生まれてくるか知っているか?」

「確かに人間の子供はキャベツ畑で、魔族はコウノトリが運んでくるんだったか……逆だったかな?」

「よし、わかつた。そのまでいい」

へんなのと首を傾げるカノンをよそに、レオン達は作戦会議をする。

「どうするんだ、あれ。というか、うーん」

「いっそレオンが教えてあげたら。手取り足取り、ね?」

「……そうだ、とりあえず俺が百回カノンにキスして子供が出来ないつて事を示せばいいんだ」

そんなレオンの発言に、イオがにまにまと笑い煽る。

「レオン、良いから襲つちゃいなゾ」

「無理だ。カノンはまだ俺の事……」幼馴染“としか思っていないから

カノンの事を大事に思つていますと暗に言つてレオンに、イオは更に楽しそうに笑つて、

「あら、純愛なんだ」

「落とす過程が楽しんだよ。それに、それをやつてから、その後で子供が見たらいけない本を買いに行かないと」

「自分で教えてあげないの? カノンちゃんに、いつもとか、いつもとか」

「……俺が知らない内に、『教えてあげるから来ない?』『分かつた』『アツ!』でなつたらどうするんだ!」

「……あのカノンちゃんをどうこう出来る人がいると?」

「はつきり言おう、工口用語で顔を赤らめるカノンが見たい!」

「よし、行け」

「ありがとう、わが友よ」

がつしりと手を握り合い、頷く一人。その一人を良い友情だなど、トランが表情を変えることなく頷いていた。

「え？……キスするの……だつて……」

あまりにカノンが顔を真っ赤にしてしまったから、レオンまで頬が熱くなる。それに顔を赤らめるカノンが可愛いから仕方ないとレオンは思う。

「その、レオンは僕と……」

「ち、違う。カノンは”幼馴染”だからそれ以上の感情は無い」

「だつたらどうして」

「……”幼馴染”だから、間違っている事を教えておかないと」

「そんな！父様が嘘をついたって言うのか！」

カノンが何故そんな事を行っていたのかレオンは気付く。そして、成長過程で何処かでそういう話を聞くはずなんだけれどなど苦笑して、

「ほら、子供の時つてそういう話はわざと避けるよつとするんだ。きつとカノンの事が可愛いから、わざと嘘をついたんだ……」

「そう、そうか……」

ショボンとするカノンの隣にレオンは座り、カノンの顎を右手持ち上げる。

そのままレオンはカノンに唇を重ねた。カノンはレオンの唇が柔らくて温かくて、”甘い”と思った。

そして思つた瞬間、何を考えているんだと慌てて飛び出す。口がぱくぱくするだけで、カノンは声が出ない。

「…………」

「何だ、この前の夜は積極的にやつてきたのに」

「だつて記憶にないし。それにキスしてもし子供が出来たら……」

「責任とつてやる。だから、やつてみよう、百回のキス」

前にも増して顔を赤くするカノン。実の所、責任とつてやるとか、レオンの顔がこうこう顔していればカッコイイと思つてたとか、本当に心臓に悪い。

そしてカノンも、してみても良いと思つ自分と、レオンが嘘つくはずないからきつとそんな事はないのだろうという、何処か残念な

気持ちで頭がいっぱい、気が付くとレオンに再びキスされていた。

今度はカノンは逃げなかつた。

なのでレオンは軽く唇をすつてから離す。

だが、そんなレオンの目に映つたカノンは何故か不敵な笑みを浮かべていた。

「下手だな」

衝撃的なことを言われて、レオンがえつ、となつてゐる隙にカノンがキスしてくる。

軽く触れて吸うだけだが、上手い。

「どうだ？ これくらいでないと」

「カノン、一体今のキスは誰から教わつたんだ！」

「え？」

「誰だ、一体誰に……」

レオンが慌てたように聞いてくる。よく見ると怒つてもいるようだ。だから、おかしなレオンとカノンは笑つて、

「誰もいないよ？ それはレオンも知つてゐるでしょう？」

確かにカノンがそういう経験がある設定で記憶操作はしていなかつたはず。案の定、レオンが黙る。

「……悪かった。続きするな」

納得がいつていないうだが、執拗にレオンからしてくる。本当にレオンは”幼馴染”が大事なんだなと思い、カノンは胸がちくりと痛んだ。

それが何だか癪で、カノンもキスで反撃を開始する。しばらくそれを繰り返して、百回になる。

「な？ 何も起こらないだろ？」「

「そうだな。僕が間違つた知識を……え？」

そこでカノンは窓の外を見て、声を上げた。

何かが近づいてくる。

それは大きな鳥で、何かを抱えているらしかつた。

それが真つ直ぐにこちらに向つてきて、そして窓から飛び込む。

大きな鳥だつた。それはいいとしてその鳥が持つてゐるものの方
が重要だつた。

籠の中白い布に包まれてそれは泣いていた。

「赤ん坊？」

誰とも無しにカノンが呟く。

それは、人間の赤ん坊だつた。

因る質問 20-1 (後書き)

お気に入り、評価ありがとうございます。とても励みになります。

web拍手に、自作絵を入れておきました。カノン君です。下手な絵で、女の子に見えるかもしれないのですが、それでも○kという方は見てやってください。

また、ムーンライトノベルの方の同名小説のweb拍手は、番外編となっています。18歳以上の方はそちらもどうぞ。今のところ投稿内容は同じです。かりうむいおん、で検索すると出てきます。IDは一般向けと分けているので、そこからのリンクではいけません。すみません。

次回更新は未定ですが、よろしくお願ひいたします

機会の逃げ足は速い

おぎやー、おぎやーと泣く赤ん坊。そしてなんか大きい鳥。

「えっと、レオン？」

次の瞬間、カノンはレオンに押し倒された。

呆然と見上げるカノンに、レオンは真剣な表情で、

「……責任持つから、最後までやらせてくれ」

そのままレオンはカノンに覆いかぶさるうとして、ドアが勢いよく開いた。

恰幅の良い女性が入ってきて赤ちゃんを抱き上げる。

「私の赤ちゃん！」

何が何だか分からない。

その女性の話によると、その大きな鳥は”「モモチ」「ウノトリ””といつて、赤ん坊と一緒に育てると、赤ん坊が攫われた時取り戻してくれるらしい。

「ただこの子方向音痴でね。本当にご迷惑をおかけしました」

そう言って、赤ん坊は彼女に連れて行かれたわけだが。

「……焦った。俺、本当に……」

「僕もだよ……」

未だに衝撃が抜けきらないらしく、ぼんやりとしているレオンとカノン。それを見ていたイオがカノンの隣に座って面白そうに聞いかける。

「どう、カノンちゃん、レオンとなるつて思つたら……」

カノンは顔を赤くしてふるふると首を振つた。

「無い、無いから。そんなの……レオンの事は”幼馴染”で仲間だとしか思つていなかから！」

「うむ、仲間という好感度アップと……こんな面白い事メモしておかなくちゃ」

そう、青色の手帳を取り出して書き記すイオに、カノンはさつとその手帳を取り上げようとして失敗し、床に顔面からぶつかりそうになり寸での所でレオンに引っ張られた。

「大丈夫か？ 少し休もう

「うん、大丈夫だよ……それよりレオン、一つ聞いていい？」

「何だ？」

そこでカノンが本当にこりと自愛に満ちた表情で、「最後までつてどうこう意味？」

「…………」

「……何か言え」

レオンは黙つたまま、ふつと笑つた。

「……合体するんだ」

「合体？」

合体つてアレだよな、魔物とかを融合させて別の魔物にしたりとかの、後は金属と融合させたりとか？。

「そう、手に様々な文様を描き出す事により、魔法を使うための呪文を短縮でき、時に目からビームを……」

「レオン、本当は違う意味だろ？」

レオンの瞳を覗き込んで、カノンは囁く。

それが予想外でレオンは目をぱちぱち瞬かせる。

「……どうしてそう思つた？」

「ずっと見ていたから、レオンがどんな時に嘘をつくのか分かるんだ」

意外に、カノンはレオンの挙動を見ていたらしい。でも、そういう事が分かるのは、ずっと目で追いかけないと気付かない。

そして、逆にそう言つという事は、カノンはいつもレオンの事を見ていますよという事で、とりあえず外野から見ていたイオは面白い事になってきたと状況を見守る。

「そうだな、だつたら最後にまでの意味、カノンに教えてやるよ。

……実技を通して

レオンの真剣な表情。イオは邪魔したら悪いかなと、空氣を呼んで席をはずそうとする。

そしてレオンがカノンの手を引っ張り引き寄せよつとした途端、再びドアが開かれた。

「すみません！ 先ほどは失礼しました。これはほんのお禮で……」先ほど恰幅の良いおばさんがへつてきて、何処か不思議そうにレオン達を見たのだった。

機会を失うとそれ以上何も出来なかつたり。

そして、そういう本を買う氣も失せたレオンは、カノンに付き添いで依頼料を貰いにいった。

「これが、今回の成功報酬です」

「ありがとうございます！ これでしばらく食い繋げる……」

後光が差すんじやないかという位嬉しそうに笑うカノンに、レオンは何故かがんばらなきやいけない気がした。

そこで、白い服を着た僧侶らしい少年がレオンに向つて走つてくる。

「レオン様！」

彼はそのままレオンに抱きついた。けれど、レオンは慌ててその少年を引き剥がして、カノンの方を見る。

案の定、先ほどと同じにこやかだが背負つている何かが違う。すぐさま、オラオラされてしまいそうなそんな怖い雰囲気。まずい、これは危険だ。

「……レオン、彼は？」

「いや、知らない。少なくとも俺が声をかけた人間なら、覚えてい るはずなんだが……」

「酷いですレオン様！ 昨日会つたじゃないですか」

「昨日……」

確かに、ホーリィロウと戦つたはずだが……レオンは首をかしげる。記憶に無い。と、

「ああ、あの時居た僧侶か。で、敵が僕達に何の用?」

「そうカノンが、その僧侶を上から下まで見て、酷薄な笑みを浮かべた。

ちなみに背が少し低めのカノンよりも彼はもつと低い。

だが彼はカノンを逆に見上げて、馬鹿にしたように笑つた。

「貴方はレオン様の一体なんですか? 聞いた話によるとただの幼馴染だそうですが」

「そうだ。それがどうかしたか?」

「ふーん、へー、それを信じると?」

「そこまでにしろ。カノンに酷い事を言うのは許さない」

そうレオンが割り込んできて、僧侶は大人しくなる。面倒な事になる気配を感じて、レオンはカノンの手を引いて足早にその場を立ち去ろうとすると、後ろから僧侶が声をかけた。

「那人、本当に魔物との混血ですか?」

機会の逃げ足は速い（後書き）

お近くに入り、評価ありがとうございます。とても励みになります。
このところかせが治つたと感つたらまたかぜの繰り返しです。
皆様もお気をつけ下さい。
ちょっと更新が遅くなるかもです。

深く考えるな、意味はない

振り返るカノンとレオン。

その瞬間に、カノンが僧侶に押し倒された。

「「え？」

間の抜けた声をレオンとカノンが同時にあげた。そして、そんなカノンと、次にレオンを僧侶が見上げてにたりと笑った。

「適当に言つたに決まっているじゃないですか」

そのまま一気にカノンの服の中に僧侶は手を突っ込んでそのまま、カノンをくすぐり始めた。

なまじ生命の危機に瀕していないので、対人スキルの低いカノンはどう対応すればいいのか分からぬ。とりあえずじたばた暴れつつ抗議の声を上げる。

「やめつ……ひつ……ひあつやあつ」

「ふふふ、よいではないかよいではないか」

僧侶は凄く楽しそうだ。そのくすぐり攻めはどんどん激しくなつていく。

加えて、カノンが凄く敏感だという事実をレオンは知る。これは非常に重要な情報だ。そう、これは非常に重要な情報だ。しかも、涙目になつて息も荒げに顔を赤くしているのも中々よい実によい。

そうレオンが、うむうむと頷いていると、

「レ……レオ……助け……ひあつ……ひあつ」

「もう一息かなあ？」

名前を呼ばれて、レオンは我に返つた。

「……助けを呼ばれたから、やめてくれないか？」

「レオン様がそういうのであれば、仕方ないですね」と、楽しそうに僧侶が笑つてくすぐるのを止めて離れる。くすぐられていないので、カノンの体がびくんびくんと小刻みに

震えている。

落ち着かせようと、カノンが息を荒げに呼吸をしているのを見てレンは心配になる。

「大丈夫か、カノン？」

「ひゃんっ！」

「…………」

抱き起こそうとしただけで、ヒロイ声が出た気がする。いや、だつて俺まだ何もしていないし、と思いつつレオンは再びカノンに触れる。

「ひつー！」

くすぐられ過ぎて感度が高くなつていい感じ。どうしたものか、本当に……。

襲おひ。

お持ち帰りして美味しく頂いてしまおう。だつてなんかこう凄くひつ、可愛いではなくて、確かに可愛いのだけれど、なんかもう良いかもつて思うんだ。

「レオン……顔が怖い……」

「はつ、俺は今何を……ぐふつ！」

引いたようにカノンが見上げていると、次にはレオンが呻くとカノンの上に倒れこむ。

「レオン、レオ……え？」

僧侶がカノンに倒れこむ前にレオンの腕を引っ張りあげて、そのまま背負う。ソ

ちなみに僧侶はカノンよりも背が低く非常に華奢である。

そのまま背負い込んで、一息ついてから僧侶はそのまま去るひつとした。だから、即座にカノンは飛び跳ねるように起き上がり、僧侶のフードを掴んだ。

「……放して頂けませんか？ 僕は貴方に用はありません」

「散々くすぐつておいて、ただで逃がすと思つか？ 僕が。それに、レオンを返せ」

「……レオン様は後、ね。それに、貴方のものでは無いでしょう?」「呆れても言えないというより、溜息を付きながら振り返りもせず僧侶が言つ。

だから僧侶はカノンがどんな表情をしているのか見えなかつた。

「それで?」

淡々とした声音。感情の無い、そんな言葉。僧侶もさすがにレオンの事を氣の毒に思つ。恋敵とはいえ、レオンがカノンの事を好きなのは一目瞭然なのに。

だから少し苛立ちながら僧侶は言い返した。

「よく堂々とそんな事が……」

そこで僧侶は言葉をとめる。思ひの他近くにカノンの顔があつた。その顔は表情が消え失せ、ぞつとするほどに冷たく美しく見えた。

「手を出すな。殺すぞ?」

「…………」

カノンの金色の瞳が、魔物の瞳が煌々と輝く。声音も、体が氷の塊になつてしまつたのではないかと感じるほどに冷たい。

命令されていると、僧侶は理解した。

これは一体なんだ?。威圧感、異質な、とても恐ろしい生き物に遭遇してしまつたような。

「もう一度言ひ、レオンに手を出すな」

その金色の瞳は、僧侶が今まで見た中で一番綺麗で恐ろしい。

逆らつてはいけない。でも、この綺麗な生き物は何だ?。

僧侶はその声に従うように、レオンをカノンに渡すその時に、カノンが”何”であるのかを知ろうと魔法かける。けれど、その魔法はカノンが一笑すると共に消え失せる。

圧倒的な力量の差だ。それは、魔族との混血なのかを疑わせるほどに。

カノンが抱きしめたレオンに目を移すと、ふつと優しい笑みを浮かべた。

その笑みがあまりにも澄んで柔らかくて優しげだから、僧侶は油

断してしまつ。

レオンに魔法をかけて抱きかかえ、去るひとするカノンに、やはりレオンを諦めきれない僧侶は手を延ばして肩を掴んだ。

その手は即座にカノンによって弾かれる。さらに、

「僕に触れるな、下種が！」

吐き捨てるように僧侶に言い切る。その日に宿る殺氣は、次は無いと物語つてゐる。

その恐ろしさに、僧侶は床にへたり込んでしまつた。

本当に何なんだあれば。今まで出遭つた魔族と全てにおいて違う。「やあ、僧侶、どうだつた？」

先ほどの行動全てが、ホーリィロウの筋書き通りだつた。レオンが僧侶は欲しかつたので、協力するという趣旨のはずだつたのだ。けれどこのような結果になつてしまつた。そして、ホーリィロウは失敗したとこ機嫌なまま。

また彼の駒として働かせられた事に僧侶は溜息をつく。いつもの事だ。だからあえてそれを問いただすことはせず、

「……ホーリィロウ様。確かにカノンが欲しいと言つていましたが、アレを？」

あんな恐ろしいものを欲しいと言つ我が勇者を、僧侶は『気が狂つて』いると思つ。

けれど、ホーリィロウはそんな僧侶の言葉に、

「そうだよ。欲しいんだ」

「僕は、恐ろしいと思いました。あれは……」

「多くの勇者が望んで止まない果実だよ、禁断のね」

「は？」

時折、詩的な表現をする我が勇者に、僧侶はもっと分かりやすく言つてくれませんかねと思つても口にしない。

以前戦士がそれを言つて、しばらく部屋から出でなくなつた。さすがにそれを今されると困る。

適当に頷いて流す受け流しスキルが僧侶の中で着実に成長しつつ

あつた。

「はあ、そうですか。それよりも次はどうするのですか？」

「暫くレオン達を追い掛け回すこととした」

願つたり叶つたりの発言に、僧侶は喜びかけるものの怖い生き物を思い出して僧侶は素直に喜べない。そんな僧侶を見透かしたようにホーリィロウは笑いかけた。

「レオンという首輪があるから大丈夫だよ。彼がいる限りカノンは何も出来ない」

そう言われて納得する。確かにカノンはレオンという時は雰囲気が違う。

ただその言葉に安心を感じると同時に、僧侶には逆に悔しくも思えた。

負けてなるものかと、僧侶は心の中で誓つたのだった。

深く考えるな、意味はない（後書き）

お気に入り、評価ありがとうございます。とても励みになります。

次回更新は未定ですが、よろしくお願ひいたします

辞書には何でも載つている

「あー、カノンちゃん、おはえりー」
イオが本当に楽しそうにけらけら笑つている。そしてトランは、
イオの前で正座して黙々とお酒を飲んでいた。

「……何で戻つてきたらまた酔つているんだ？」

「赤ちゃんのお母さんが、お礼だつてお酒も持つて来てくれたの。
本当においしゅうござります。トランもそう思わない？」

「……うむ、酒さえあればどんな奴らでも倒せる気がする」

と頷く一人に、カノンは頭痛がした。とりあえず気絶したレオン
をベッドに横にならせて、

「今回の依頼で当分は食いつないでいそうだよ。でもなくて困る
ものでもないからこまめに稼いでおかない」と

「ふーん、じゃあそろそろ他の町に移動する？　」
の依頼、ホーリィロウ達が片つ端からクリアしちゃつたから、あんまり良いの残
つてないし

「……なるほど、奴らを避けながらの方が美味しい依頼を手に入れ
られると」

ちなみに、ホーリィロウ達はカノン達を追跡予定であるが、カノ
ン達は知らない。そもそも、

「あの、僧侶つて奴が気に入らない！」

面白そうな気配を感じて、イオがカノンに近寄つてきた。

「何があつたの？　カノンちゃん」

「聞いて！　あいつ、僕の事をくすぐり放題くすぐつたと思つたら、
レオンを氣絶させて連れ去るうとした！」

「ふむふむ、それでカノンちゃんはどうしたの？」

「もちろん取り返してきたぞー。まったくレオンは油断しちゃー。」

「それでなんでカノンちゃんはそんなに機嫌が悪いの？」

「それは、”幼馴染”のレオンが連れ去られそうで、そんな弱いレ

オンが許せなくて……」

本当にあの僧侶は許せない。まさかレオンを連れて行こうとするなんて。

僕のレオンを。

そこまで考えてカノンは首をかしげた。

今、自分は何と考えた？。レオンはただ利用するだけで、でも良い奴だから好感は持つてて、優しいし、真面目な顔してればカッコイイし、たまに犬みたいに懐いて来てそれも嬉しいし。

なるほど、ペットに対する愛情と同じか？。そうか、僕はレオンをペットにしたいのか。

でも人間だし、動物と同じようには無理だよな？……どうしよう。

「……カノンちゃん、何か変な事考へているでしょ？」

「そんな事無い！ 真面目に考へていただけだ！」

イオは、真面目に考へてキス百回すると子供が出来るとか言つていたんじやなかつたかなと思つたけれど、黙つた。とりあえず今は生暖かく見守るう、”仲間”として。

そこで、カノンの手に古ぼけた本が一冊ある事にイオは気づく。

「カノンちゃん、その本は？」

「辞書だよ。古本屋で買つてきたんだ。安かつたから」

「何でまた……魔道書とかの方が良いんじやない？」

「……この前の事といい性の知識が僕には足りていない。だから辞書を見て勉強する事にした！」

「あ、うん。確かに辞書にはエッチな言葉とか載つているもんね」

「でしょ？ これでもうレオンに馬鹿にされないぞ！ 最後までの意味を、絶対調べてやる！」

その情熱は素晴らしいとイオは思つたが、そもそもそれ系の大人の本を見れば一発なのではなかつと思う。

あ、そういう本があること自体知らないのか。なるほどなるほど

……本当に箱入りだな、オイ。

などと、イオが思つてゐる事も知らず、意氣揚々とカノンは辞書

を調べ始める。

だが、相手をしてもらえないのも酔っ払ったイオはつまらない。もくもくと酒を飲んでいるトランを見ているのも楽しいのだが、先ほどカノンと話している途中許容量を超えたたらしく倒れて泥酔している。

「そりいえば素直にくすぐられるなんて、カノンちゃん、珍しいね」「……敵意が無かったから」「ほう、良い事聞いたやつた」

にまーと笑うイオに、カノンは身の危険を感じる。そもそも酔っ払いと関わって良い事があつたためしがない。この前は樽に突っ込まれたし。

「ま、待つて、まず話を……」

「問答無用、てい！ ふふ、カノンちゃんてあつたかーい」

「やめ！ 抱きつくな！ 放せ！」

「酷い！ そうだよね、カノンちゃんこんなに抱き心地が良いものね」

「文章が明らかにおかしい！ 僕に抱きつく前に寝ろ！」「やーん、カノンちゃんのいけずー、と見せかけてすりすりすり

「ふえ！ ちょ、そんなとこ触らないで！ ふえ、ひん！」

イオがふにゃふにゃ笑いながら顔をこすり付けてくるのを引き剥がそうと、カノンは懸命にがんばつていると視線を感じた。

見るとレオンが真剣な表情で一人を見ている。それにイオが気付いて、

「良い仕事しているでしょ？」「

「ありがとうございます。しばらくおかげ無しで大丈夫です」

「二人とも訳の分からぬ事言つてないで、レオン、助け……」

「レオンも混ざる？」

面白そりにイオが誘つ。それにすぐさまレオンは頷くとした。しかし、じろりとカノンに睨まれて、レオンは固まつた。そんなレオンを見て、イオが本当に面白そうに、

「じゃあ、カノンちゃん、レオンをからかってみる?」

「え? どんな風に?」

耳貸してと言つて、カノンが耳を近づけると小声で耳打ちした。

レオンは嫌な予感がした。

カノンがレオンを見て、悪戯っぽく笑う。

「レオンの事は遊びだつたんだ」

レオンは、先ほどよりも固まって、真剣にイオに言つた。

「イオ、言わせて良いことと悪い事がある」

「おや、レオン怒っちゃつた。こういう時はお酒を、カノンに飲ま

……くづ

イオが立ち上がつたと思つたら、ベッドに倒れこんだ。いい加減酔いが回つたらしい。

ようやく開放されたカノンが、起き上がつてほつと一息を付いて、次の瞬間悲鳴を上げた。

「僕の辞書が……濡れて……ああ、もつ中の文字が見えない……」
水差しに浸されて、辞書が大変な事になつていて。うつうつと泣くカノンに、レオンはにこやかに笑つて、

「ははは、残念だったなカノン」

「レオン、まさかわざと?！」

「さあ、どうだらうね、と、はは、当らんぞ!」

カノンが杖を振り回すと、レオンがそれをひらりとかわす。そうしばらくして、二人とも疲れてしまいその日は寝てしまつたのだった。

辞書には向でも載つてゐる（後書き）

お気に入り、評価ありがとうございます。とても励みになります。

次回更新は未定ですが、よろしくお願ひいたします

引いた時点でお前は負けだ

「何でジュース1本が500リンもするんだ！ 適正価格つてあるだろう！」

「はいはーい、カノンちゃんどいてね。……おじさん、2リンでどう？」

「いいよ」

あつさりと値引きをしたおじさんを見て、カノンは唖然とする。何だこれ。

カノンが目を白黒させているのが面白いのか、イオは先ほど買ったジュースをカノンに一つ渡す。

釈然としないながらも受け取り、席に着き、その飲み物に口をつけると優しい甘さが広がった。

町の一角の喫茶店。飲みものをカウンターに買いに行つたカノンが凍り付いているのを察して、イオが助け舟を出してくれた。といふか、

「……なんで？」

「うん、もつと値切れたっぽかつたね。それともカノンちゃんが可愛いからおまけしてくれたのかな？」

「いや、そうではなく、何であんな値段に？」

「ああ、カノンちゃんは知らないんだつけ。この町、フーリエの町は商人の町でね。大抵、一番最初に吹つかけてきて、それを何処まで値切れるかという、そういう町なんだ」

「だから500リン？」

「そう、値切られる事前提。何も言わなければ店はぼろ儲け。他の町は商品についた値段をそのまま買うでしそう？だから初めてでこの町の文化知らなくて、多くの場合、相手の言い値で買つてしまふか、話もせず怒つて拒否して帰っちゃつたりするんだ」

「それじゃあ駄目なんだ。なるほど、だから値引き交渉を……」

「うん。それに初めにす「」い値段にしておくと、普通の値段でも安く思えるでしょ?」

賢い町だとカノンは思つ。

それに商人の町というだけあつて色々な物も売つてゐるし、何より先ほどイオに買つてきてもらい食べた果物も美味しかつた。本当によそ見しすぎて危なくイオとはぐれる所だつたのだが。

現在新しい町に来て、イオとカノン、レオンとトランの二組に分かれて、買い物をしている最中だつた。

カノン達は、簡単な装備で、レオン達は少し重めの装備が必要なので二つに分かれたのだが。

「は! レオンがまた何かアホことをやつてゐる気がする!」

「カノンちゃん、本当にレオンの事が大好きだね」

「な! イオ、そんな事……」

「”幼馴染”として大好きなんだよね!」

にまにま笑うイオにカノンは嵌められたと思つた。そして、ぶすつとして、

「イオはトランの事はどうなの? 好きなの?」

「好きだよ、性的な意味で」

ここまではつさりと言わると、カノンは更に仕返しと思える言葉が浮かばない。

悔しくなつて、むーと唸りながらジユースに口をつける。

本当にカノンには分からぬのだ。確かにレオンといふと居心地がいい……のか?。

色々と今までの所業を思い出して、カノンは何故このパーティにいるのだろうと再度悩みかける。

それでも、レオンはいい奴で。もう少ししだけ一緒にいても良いとかノンには思えてしまう。

そんなカノンをイオは面白そつと眺めていたのだった。

「何とこの鏡、好きな相手を映してある言葉を唱えるとあら不思議

！好きな人の色々なエロイ姿が！」

山盛りの人だから。全員男ばかりだが、そもそも全人口で女性の割合が少ないのだがそれを覗覗目に見てもアレである。

「おい、トラン、これは買いだよな」

「そうだな、レオン。これを買わねば男ではない」

今なら可愛いお守りも付けて、いちきゅつぱの一、と話をしているおじさんに、これ買いますとレオン達は告げたのだった。

「で、それで装備はこれだけしか買えなかつたと」

「お許しくださいカノン様。ほんの出来心だったの『」」

「ささやかな夢を買つたので『」」

「僕、まさかトランにまで正座でお説教する事になるとは思わなかつたよ」

ふふふと顔はにこやかなのに、どす黒い怒りの雰囲気をかもし出しながらカノンは仁王立ちになつていて。

そして一時間が経過した頃。

「カノンちゃん、そろそろ休憩したらどうかな

「とりあえず、トランは開放。レオンは追加だ」

「何で！」

「気に入らないから！ まったく無差別にそんな……」

「カノンだつて興味は無いのか！ ちょっと魅力的だなつて子のエロイ姿！」

言われて、レオンのが見てみたいな、とか頭に浮かんだものの、何でレオンのものが見たいんだ僕は、とカノンは打ち消した。

そもそもレオンは目移りしすぎて良くない。まったくレオンは僕だけを見ていれば良いのに。

”幼馴染”なんだから。

と、そこでトランが悲鳴を上げた。

「な、何ということだ！ く、こんな事つて……」

「カノンちゃん、これにただの鏡みたい

そこでレオンが悲鳴を上げた。

「そんな！俺の夢が！」

「レオンもそんな悲痛な顔をしないで。僕も残念だけれど、出店によくあるんだ、こつ実際買つてみると……て」

「ぐ、明日店主に……」

「明日は、僕と一緒に防具買いに行こつね、レオン」
にっこりと笑うカノンがレオンの肩を叩いた。そんなの探すよりも、まずは防具だ。

だつてレオンは弱いのだから。

それを見て、イオが、じゃあ明日はトラン、一緒に買い物に行こうねと誘っていた。

ちなみに嘆きつつも、レオンがにやりと笑っていたのをカノンは気づきもしなかつた。

そんなこんなで、レオンは田を放したら駄田だ、買い物でも、とかノンは学習したのだった。

引いた時点でも前は負けだ（後輩や）

お気に入り、評価ありがとうございます。とても励みになります。

次回更新は未定ですが、よろしくお願いいたします

誤解ですか、うふふ

「カノンちゃん、レオンをそんなにロープでぐるぐる巻きにしてどうするの?」

「寝たふりをして様子を見ていたら、早起きして逃げようとしたしゃがりましたので」

「うーん、縄抜けされたら終わりなんじゃない?」

「……レオン、縄抜けとか出来たりする?」

「ふ、俺の辞書に不可能という文字は無い」

「欠陥品の辞書の話は良いとして、出来るの?」

「見よ!」の華麗なる技!」

しゅるんと縄から抜け出るレオンを見て、そしてそんな自慢げなレオンを見て、カノンはレオンの手を握った。

「え?」

「」の前服を掴んでいたら逃げられたから、手を握る事にした。こうしていれば逃げられないでしょ?」

「え、あ、うん。ソウデスネ」

「レオン、良かつたね」

まったくレオンには困ったものだ。やつぱり僕が付いていないといけないらしいと、カノンは嘆息する。

そんな二人の様子を、イオがにまにまと笑つてみていたのだった。

「じゃあ、僕達も手を繋!」うか、トラン」

「うむ」

そんなイオとトランと別れて、防具屋へ。

「えーとこれとかこれは? これぐらいで……」

店員と交渉していると、ちらちらと客がカノン達の方を見てくる。なんだろう? と思っていると、小さい声で誰かが舌打ちして、

「ち、アベックで買い物に来るなよ」

え？、誰がアベック？、いや、そういえば恋人同士は手を繋ぐもので、今カノンはレオンと手を繋いでいて、いや、だつて逃げないようにしているだけだから。

これでお願いしますと、防具を買つて、慌てて外に出る。

「カノン、どうしたんだ？」

「防具を買つたから、もう手を離してもいいよね。レオンも好きにしていいよ」

「じゃあ、俺はもう少しカノンと手を繋いでる」

「何故！」

だつて、それでは本当に恋人同士みたいではないか。カノンとレオンが恋人同士。カノンはそう考えると胸の鼓動が速くなり、頬が熱くなる。

「カノン、顔が赤いぞ？」

「だ、だつて手を繋ぐなんて……」

「昔は繋いでいたじゃないか。子供の時。”幼馴染”なんだからおかしくないだろ？？」

言われて、そうかもとカノンは思つた。友達と手を繋ぐ事は良くある事だ。

「そ、そう言われてみれば、そつかも」

「何だカノン、恋人同士に見られるかもつて思つたのか？」

「う、それは」

「言わせたい奴には言わせておけばいいさ。それに手を繋いでいれば、はぐれる心配も無いだろ？」

レオンのくせに、もつともな事を言つとカノンは少しむくれる。そんなカノンをレオンが引っ張る。

「せつかくだから名所を見に行こう。それくらいは良いだろ？」

「……帰りにギルドによつて、依頼を探すから、それを忘れなければ別に……」

「ようし、そうと決まれば俺、がんばる！」

「何をだ！」

そんな事を話しながら、カノンはレオンに手を惹かれて走り出したつたのだった。

綺麗な花畠が広がっている。確かに美しいし、それを見るのはカノンも好きだ。だが、

「何でそこら中でいちゃいちゃと……」

カノンは彼らを見て、頭が痛くなる。あと人前でキスをするな。もつと慎み深さを持て。

そんなカノンを見てレオンが、

「いや、名所つてそういうものだから」

「……一人つきりになれる所が良い」

「え？」

「あいつら田障りだから、静かな所に行きたい」

仕方が無いなど、レオンに手を引かれたその場所は本当に人は居なくて、花畠が一望できる場所だった。

「カノン」

名前を呼ばれて振り返ると、レオンの手に一輪の花があつて、その花をカノンの髪にさした。

「綺麗だよ、カノン」

「な！」

そんな事を言つてレオンが優しく微笑むから、カノンは顔を真つ赤にしてしまう。

そのままカノンの髪にレオンが触れて、カノンは急いで逃げ出した。

けれど手を握つたままだから、すぐ引き寄せられて、カノンは何にが何だか分からなくなる。

顔が熱くて頭がぐるぐるして、まともにレオンの顔が見られない。

「どこにも行くなよ？」

「え？」

「消え入りそうに綺麗だったから、不安になつた」

「……もう、ギルドに行こう。やっぱり早めのほうがいい依頼があると思うから」

「カノンがそういうならそうかもな」

レオンがすぐに納得したように頷く。だからカノンはほっとした。自分は魔王だから、いずれレオンの前に敵として現れるだろう。けれどそのとき自分は本当に……カノンは、小さく溜息をついたのだった。

「以前来られませんでしたか？　あ、その人は赤い目でしたね」
カノンを見た受付の人が、そんな事を言うのでカノンは心の中で思つた。

自分みたいな者は、引きこもりになつてている父様くらいだろう。
失礼な。

そして依頼が一つ。

「泉の水を汲んでくるだけで、1500リン？」

破格の値段だが、この程度ならば大丈夫だろうと受けにした。そして、

「そういえばレオン、新しい技、どうする気だ？」

「もう決めた」

「……聞いていい？」

「見てのお楽しみだ」

即座にその技を忘れさせようとするカノンとレオンの攻防は、宿に着くまで続けられたのだった。

誤解ですか、うふふ（後書き）

お気に入り、評価ありがとうございます。とても励みになります。

次回更新は未定ですが、よろしくお願いいたします

泉の水を汲みに、カノン達はどうしてこんなに依頼料が素敵な事になっていたのか分かった。

「つる系の魔物か」

カノンも先ほど杖を取り上げられそうになり苦戦した。だから触れればすぐに炎系の魔法で燃やしているのだが。

うにょうにょと蠢く縁の蔓がかなり広範囲に広がっていて、時に触手のように攻撃をしてきて倒しても倒してもきりが無い。一点に集中して突破することも考えられるが、泉に着く前に触手に囲まれてしまう事だらう。

魔王としてであれば、容易にこれを突破できるのだが、さてどうしたものかとカノンが考えていると、

「カノン、『めん』

「へつ？……わああああ

いきなりレオンにカノンは蔓の中に放り込まれた。

先ほどから捕らえようと蔓を伸ばしてくるだけなので、特に実害は無いと言えそうなのだが。

ずるりとカノンの触れた辺りの蔓が動く。

嫌な予感がしてカノンはそこから離れようとすると、まずその動きを抑えようとするかのようにカノンの手に絡みつく。

「放せ！ やめっ！ レオン、見てないで……ひんつ」

腰の辺りに蔓が絡み付いて、そのままカノンの服の中に蔓が潜り込む。

肌に直接蔓の冷たい感触を感じて、カノンは鳥肌が立ちびくつと大きく弛緩する。

この、下等な魔物の癖にこの僕に触れようとするなんて、といつ怒りと、何でレオンはこんな事をカノンがされると分かっているのに放り込んだのかと悲しくなる。

更に数本の蔓がカノンに触れようと近づいた所で、

「よし、今だ！」

一斉にレオン達は攻撃を開始したのだった。

「あのタイプの魔物は餌を捕らえると、本体がそこに近づいて来るんだ」

レオンが何処か得意げである。加えて、カノンの衣服が乱されて、ちょっとエロく見えるのによつしゃあと思つていたりする。だがそんなカノンは、非常に機嫌が悪い。そしてまだ蔓の魔物は沢山いる。ので、

「そりかそりか。こ・ん・ビ・は、お前がいけー！
や、ちよつ、うわああああ

レオンがカノンによつて蔓に放り込まれた。

だが、今度は蔓の魔物の方が嫌だと言うかのように身を引いた。それに何かレオンは思う所があるらしく、手を近づけると蔓の魔物が逃げていく。

「傷つくわー」

「それは僕の台詞だよ。何で僕はいいのにレオンは駄目なんだ。ちよつとは楽しみ……じゃなかつた、レオンにお仕置き……じゃ無くて、どうでもいいか

「カノン酷い！ こんないたいけな”幼馴染”に！」

「誰がだ！ だとしたら僕だつて”幼馴染”だろ？」

「カノンはいいんだ！ 僕が見たかつたから！」

よし、少し再教育だ。レオンの体にたつぱりと染み入るよつに僕の思いを……。

「カノンちゃん、あのタイプの魔物は、受けが専門と攻めが専門がいるんだよー」

「イオ、という事は、攻め専門の魔物を……というか、レオンて攻め？」

「そもそも何で僕が受けなんだ。攻めだつていいじゃないか」

「カノンちゃん、現実は残酷だけれど氣を確かに持つて」

「イオ、言つてはいる事がよく分からぬ！ 僕は男だ！」

「ああ可愛い、本当に可愛いよカノンちゃん…」

「抱きしめて頭なでないでよイオ！ むー！」

「そりだぞイオ！ そんな羨ましい事！」

「あれ、レオンもしたいの？ どうする、カノンちゃん？」

楽しそうなイオの声。そしてレオンに抱きしめられると聞いた瞬間、カノンはなんて事を言つたんだイオを見た。一方レオンは、

「え？、俺に抱きしめられて頭撫でられたいのか、カノン」と、情緒とか、顔を赤らめるとか何も無い。それがカノンには本当に悔しくて悔しくて悔しくて……。

呪文を唱えて、一匹蔓の魔物をしとめた。

「……カノンちゃん、怒つてる？」

「何が？」

冷たくイオに答えると、怖ーい、とイオはカノンを放した。

そして、そこで異変が起きる。

蔓の魔物達が道を開ける。そして何処かへとずるずると去つて行く。

「……何が起つたんだ？ こちらには都合がいいが……カノン？」

「…………」

カノンはいなくなつた魔物の方角をじつと見つめる。

その魔力の気配は懐かしいもので、といつが、父のものだ。

引き籠もり氣味の父が出て來たという事から、あいつも居るのは間違いないとして。

いや、だいつ嫌いなあいつが父を守らなければどうなるか不安で仕方ないから良いのだが。

非常に不本意だが。

でも、今回は助かつたかな。

実の所、既に町に戻ることが出来ないほどに蔓の魔物に囲まれて

いでどうしようかと思つていたのだ。

広範囲から狭められて気付かなかつた。力を抑えているのが災いしたか。

それにその事をレオン達に話せばなんで分かるのかは誤魔化せることも、もしそれをどうにかしようとしたなら……力を隠していしたこと、ひいては何故そんなに強いのかといつ点から記憶操作が解けてしまうかもしねり。

もしそうなつたなら、”仲間”全員が敵に回る。罵倒され、カノンを殺そと襲い掛かるだらう。

レオンに憎しみの籠つた目で見られて、剣を向けられる……そんなんの、嫌だ。それに、イオにトランだつて短い間だけれど一緒にいて、もつと僕はここにいたいと思つた。

確かに魔王と襲つた時はただ利用するためだけのつもりだつたのに、確かにあの時はそんな目で見られても何とも思わなかつたのに、今は、少しでも長くその時が来なければいいとカノンは思つてしまふ。

戸惑うような仲間達。そこでイオが、

「んー、なんか変な気配を感じる……カノンちゃんは？」

「僕は良く分からぬ。でも、これで依頼は簡単にこなせそうだね」

「……そうだね。じゃあ、急いでつか」

そう、につこり笑うイオが、カノンに見えない位置でレオンヒトランに目配せするのをカノンは気づきもしなかつた。

しゃべじゅじはなめなせり（後編）（後編）

お戻りに入り、評価ありがとうございます。とても励みになります。

次回更新は未定ですが、クリスマスに出来たらなと思います。
よろしくお願いいたします

隠したもののはばれている

無事綺麗な泉の水を汲んで、町に戻ろうとした時、魔物の移動が始まった。

「カノン！」

一番初めにカノンが分断される。レオンの目がいつになく鋭くなり、蔓の魔物を切り裂いていくが次から次へと湧いてくる魔物には対処できない。と、

「レオン、心配しないで！ 後で合流できそつだから！ 僕は別の道で町に戻るよ！」

「……分かった」

レオンがあつさり諦めてくれたのには、カノンはほっとすると同時に、胸の中でもやもやしたもの抱える。

大丈夫だと言つて信じてもらえるのは嬉しい。それだけカノンが信頼されていると言う事だから。

でも、それを押し切つてカノンを助けようとしてくれたら良かつたのに。

何を考えているんだ、僕は。

本当にレオンといふと調子が狂う。かといって嫌なわけではなくて、むしろ、一緒にいたい。

何だろう、これ。

自分の気持ちと理性が一致しない。気持ち悪い。

そこで気配を感じた。懐かしくて、そしてカノンが大好きな魔物の気配。

「カノン」

そこで名前を呼ばれて、カノンは本当に嬉しそうにその声の主を見た。

「父様！」

そこに居たのはカノンにそっくりの、けれどカノンよりも気弱そ

うで、けれど優しそうなカノンの父だった。

そのままカノンは、抱きつくと、父は幼子をあやすように頭を撫ぜたのだった。

「今度は俺が分断されそうだな」

カノンが見えなくなつた後、今度はレオンがイオとトランが分断されかかっていた。

剣を仕舞い込んでレオンは溜息をつく。

「トラン、イオ、お前達は先にギルドに依頼のものを届けて、宿に戻つていってくれ。どうもこいつらを支配している何かは、カノンだけではなく俺にも用があるらしい」

「……レオン、カノンちゃんならともかくどうしてレオンまで……」「イオ、レオンが本当はどれ程強いか、俺達は知っているだろ？」「トラン……」

「そういうことだ。いざとなつたら強行突破するから問題ないさ。心配してくれてありがとう、イオ」

「一応僕達の勇者様だからね」

一応は余計だとレオンがイオに毒づく。そして気配が遠のいて行くのが分かつた。

それを不安そうにイオが見ているので、トランが手を引っ張つて歩き出す。

「……カノンがレオンを気に入つてているから、悪いよつこはならないだろ？」「それはそうだけれど」

「イオは、カノンの事をそう思つ？」

「初めは怖かつたけれど、今は平氣。むしろ可愛いと思つ」

「俺も同感だ」

「……」

「トラン、浮氣は駄目だよ？」

「……」

「イオーリヤ」

「…………」

「…………」

「レオン、カノンちゃんと両想いになれるといいね」

「そうだな、それが一番良いかも知れないな。……所で依頼料でお酒を少し買おうか」

「あ、それいいね。つまみも買っていいつか」

そんなトランとイオの、超嬉しそうな話声が聞こえたわけではな
く。

カノンはそこはかとない嫌な予感をその時感じたのだった。

「貴方ですか？ 僕を呼んだのは」

「ああ、そうだ。いや、敬語を使つた方が良かつたかな？」

へらへらと笑う、赤茶色の髪の男。美形であると同時に、この雰囲気はホーリィロウに通ずるものがあり苦手だ。

そして笑っているのに、緑色の瞳はまるで值踏みするかのようにレオンを見ている。

だから、レオンはこちらから仕掛ける。

「魔物を操れるのは魔王のみと聞いています。貴方は魔王ですか？」

「私が魔王に見えるかい？」

何処か余裕めいた笑みを浮かべる彼に、レオンは首を横に振り続ける。

「ただの人間にしか見えません」

「ふむ、では魔王は？」

「一昔前に倒された魔王カノンカースが最近になつて復活したと聞いています」

「魔王は復活したと本当に思うかい？」

「そもそも倒されていないのでは？」

「…………」

「…………」

「君は何処まで知っているんだい？」

「その前に、貴方の名前はレイルでよろしいですか？　かの魔王、カノンカースを倒した勇者」

そこで彼、レイルは楽しそうに笑い出した。

「君に隠し事をしても仕方がなさそうだから、本当の事を言つよ。いかにも、私は勇者レイルだ」

「やはりそうですか。そして俺が誰なのかも、貴方は見当が付いているのでは？」

「そうだね。それに君、カノンの記憶操作が効いていないだろ？」

「ええ、初めから」

言い切つたレオンに、思案するようにレイルが問う。

「……何で一緒にいるんだい？」

「カノンを自分のものにしたいからです。そして、逃がすつもりもありません」

きっとぱりとレオンは言い切つた。それが本心なのだから。ずっと欲しくて、必ず迎えにいくと決めていたから。

初めに半殺しにされた時、自分の記憶の中の彼、それが成長した姿に擬態して襲ってきたのだと思つた。

なのに、目を覚ませば本当に成長した彼がいて。

でも記憶操作が効いていないと分かれば、きっと何処かへ行ってしまうから。

だから気付かないふりをして一緒に居た。

一緒に居たカノンは昔と同じで、気が強くて優しくて、強くて綺麗だった。

だから少しでも、カノンがレオンを気にするように色々色々手を打つているのだ。

もう逃がすつもりなんて無い。

そんなレオンの心中を察してかレイルが、

「どうか、私と同じか」

と言つた。その言葉にレオンは不安を覚えて、

「……貴方もカノンを？」

だが、それは杞憂に終わった。レイルは首を困ったように横に振り、

「いや、私はカノンの父、トリュー・カースの恋人だ。そしてカノンはファザコンで……意味が分かるだろ？」

「カノンを落とすのを協力して頂けると、そういう事ですか？」

「ああ、トリュー・カースを襲おうにも、毎回カノンの食事に睡眠薬を入れないといけなくて」

困ったものだと笑うレイル。

レオンはとても良い先輩であり、協力者を手に入れた。それにレオンに協力する事が彼にとっても利益になる。これはいい。

だからまずレオンは、

「その、カノンの父をどうやって落としたのですか？ 僕もカノンを落とす参考にしたいのでぜひ教えてください！」

「多分参考にならないと思うよ？」

「それでも良いです！ 僕は少しでもカノンに関することが知りたいから」「

そうすれば、カノンの心を乱す新しい方法が見つかるのだから。少しづつ少しづつカノンの心をレオンは侵食して、気が付けばレオン無しではいられなくなるまで追い詰めなければならないのだから。

そんなレオンの情熱に昔の自分を思い出すかのようにレイルは目を細めて話し始めたのだった。

隠したものばれてる（後書き）

お気に入り、評価ありがとうございます。とても励みになります。
次回更新は、本日10:00となっています。よろしくお願ひいた
します

子供はつらじょ（一）

魔王城にて。

「いいですか、父様！ これから父様の食料やら何やらを買って来る、ついでに採ってきますから、絶対誰かが来ても出ちゃ駄目ですよ…」

「分かっていますよ、カノン」

「……一応魔物とかを使って、人間を攻撃しているので、勇者やら何やらがそこらへんうろついているから、父様は相手しなくていいですからね！ 歴代最弱魔王なのですから」

「分かっています。でも最弱と言わるのは心に響くかな……」

「ああ、ごめんなさい、父様。そういうつもりではなかったのです。でも、父様は綺麗だから悪い奴らに何かされないか心配で……」「カノンは心配性ですよ。一応普通の魔物よりは強いのですから。ほら、もう行きなさい」

心配そうなカノンが、フードをかぶつて顔が見えないような服装でもう一度振り返つて、走り去る。

そんなカノンが居なくなつて、彼の父であるトリューカースはこそそそと遠見の水晶玉を取り出して覗き込む。そこには一組の勇者達が映し出されている。

随分前から、ほんの気晴らしに外を見ていた時に見つけた彼ら。その勇者にトリューカースは目を惹かれた。

赤茶色の髪に、緑の瞳の男。

手に入れたいと思つた。これほど欲しいと渴望したのは、トリューカースは初めてだつたかもしれない。

けれど現魔王で過保護な息子が、そんな事を許さない事は分かつていた。

だから、こう機会を伺つて今日という日が来たのだ。

そもそもトリューカース自身だって、弱いとはいえる魔王なのだ。

弱いとはいえ、そこら辺の魔物よりはずつと強い。

それに歴代魔王は以前から、愛玩の為に勇者を捕らえることもしばしばあった。

だから自分だつてそれをしてもかまわないはずなのに。

以前カノンにそれを話したなら猛反対されたので、今回は黙つてする事にした。

そんなわけで、かの勇者達の前にトリューカースは姿を現して捕らえようとしたのだが。

思いのほか連携プレイやら何やらで強い。しかも顔を隠したフードが取れたと単に更に彼らの勢いが増した。

力では勝つていたはずなのに、分が悪いとトリューカースは判断してその場を逃げ出した。けれど、

「逃がすと思うか？」

そんな笑いを含んだレイルの声と共に、魔法をくらつてしまつ。そのままトリューカースは地面に倒れた。

起き上がる事が出来ず、もがくように体を起こそうとするが体に力が入らない。

殺されると、この時初めてトリューカースは怯えた。カノンの忠告をきちんと聞いておけば良かったのに。

足音が近づいてくる。

そのまま乱暴に仰向けに転がされて、首筋に剣が突きつけられる。その剣の主は、トリューカースが欲しいと思つたレイルだつた。仕方ないと、そして自分が欲しいと思つた者の手で殺されるならばそれも一興ではないかと自分を慰める。

そこで、レイルが酷薄な笑みを浮かべてトリューカースに問いかけた。

「このまま殺されるか、それとも私の物になるか、好きな方を選べ」

その意味を考えて、トリューカースはぞつとした。

殺されるのは、嫌だ。

けれど彼のものになつて、一体自分はどうされてしまうのだろう。

顔を蒼白にして震えだすトリューカースに、レイルは追い詰めるように続けた。

「後三秒以内に決める。私は気が短い。もしも答えないのなら、殺す」

3・2・1と数えられて、堪らずトリューカースは叫んだ。

「貴方の……ものになります。だから……」

許してと、トリューカースは震える声で答えた。それにレイルが満足そうに頷いて、剣を引いた。そして、

「あ！」

「歩けないだろう？ お前は私のものだから、連れて行ってやる」抱き上げられて、トリューカースはレイルに抱き上げられたのだった

人間の使う転送陣を利用して、近くの人の村へ。とられた宿で、彼の名前をまだ聞いていないと、レイルは思い出す。

「お前、名前は？」

「……トールです」

とつさにトリューカースは嘘を付いた。もしも現魔王の父だと知れたら、カノンに迷惑がかかつてしまつ。

それにそうなつたなら、自分は今度こそ殺されてしまうかもしない。いや、殺されるよりも酷い事をされるかもしれない。

だからトリューカースはトールと名乗る。

けれど名乗つてすぐに、トリューカースは少し後悔した。

「そうか、トール、というのがお前の名前か」

レイルがそう微笑んだから。その笑顔にとても惹かれて、トリューカースは自分の名前を呼んでほしいと思つてしまつ。

けれど一時の感情で、名を言つわけにはいかない。

そして、トリューカースはそのままレイルに抱きしめられて、その日は眠つてしまつたのだった。

トリューカースは首に鈴の付いた首輪を付けられる。居場所を示す鈴と、力を封じるアイテムだった。

それを除いては、トリューカースの扱いはまるで恋人かなにかのようだつた。

トリューカースが偏食家で果物しか食べないのを知ると、それらを手に入れてくれたり、魔物と遭遇した時もトリューカースを庇つて前へ出たり、悪い奴に声をかけられると怒つたように手を引いてつれて帰られたり……優しい。

レイルのものだというのに、壊れ物を扱うかのように大事にされている。

するのはキスと抱きしめられて眠るだけ。こんな心地よく甘くされては、そして見初めたレイルにそんな事をされでは、トリューカースは魔力を封じられる以上に逃げられない。

最近、レイルが愛おしくなつてしまい自分からキスをしてしまつた。

その時のレイルの顔があまりにも焦つたような子供のようだったのでつい笑つてしまふと、そのまま激しくキスをされてしまった。あれ以来特にトリューカースに優しい気がする。

もう少しだけ、レイルの傍にいたい。

本当は愛していると言いたい。けれど、言つて拒まれたらトリューカースは立ち直れない。

それでも諦める事ができなかつた。体を好きにさせてもいいから、傍に居たかつた。

だから、未だにレイルの傍にトリューカースはいる。

カノンには心配しないよう、場所が分からぬよう、けれど安否だけ分かるように魔法で連絡を取つていた。

そんなる時、トリューカースが以前他の者と関係を持つていた事がばれた。

怒つてしまつたレイルとしばらく口も利かないでいたある時、目

を覚ますとそこにはレイルの姿は無く。

身支度を整えフードをかぶり、魔物といふことがばれないようにして宿の人間に聞くと魔物の討伐に出かけたといふ。

妙な胸騒ぎを覚えて宿で待っていると、瀕死になつたレイルが運ばれてきた。

死なないでと泣き叫びながら、トリューカースは自分の全ての魔力を使つてレイルを癒す。

その時、『愛している』とレイルが言つた気がして、トリューカースは胸が締め付けられそうだった。

死なせはしない。だつてトリューカースは、レイルが本当にそう言つたのかを確かめなければならないのだから。

そのまま魔力の使い過ぎでトリューカースは意識を失つたのだった。

予供がつらこ（一）（後書き）

お氣に入り、評価ありがとうございます。とても励みになります。

この回と並つか次回なのですがムーンライトノベルズの方はR18方向に加速しております。18歳以上の方はそちらも楽しんでいただければ幸いです。

次回更新は、本日13:00となっています。よろしくお願ひいたします

子供はつらじょ（2）

レイルは怒りに震えていた。

アレほど初心な雰囲気を纏つたトールに触れた初めての男が自分で無いなんて。

自分だけのものにしたかったのに。けれどあの上手なキスも他の男が仕込んだものだつたのだろうか。

そう考えると、レイルははらわたが煮え返るようだつた。

許せなくて許せなくて、けれどトールのことは諦め切れなくて。トールの全てをレイルは自分自身で塗りつぶしてしまひたかつた。そんな事を考えていたためか、いつもなら負わない怪我を負つて瀕死の重傷を負つてしまつ。

「死なないで！」

そう叫ぶトールの姿に、レイルは笑みを零す。声を出す事もできず、小さく唇で『愛している』と呟くと、トールが大きく目を見開いたようだつた。

伝えるべきことは伝えたと、レイルはそのまま意識が徐々に薄れて……次に目を覚ました時には、自分のすぐ傍にトールが眠つていた。

その顔がとても綺麗で、そういうえばトールの顔をこんなにまじまじと見たのは久しぶりだと気付いた。

そこでその双眸が揺れてゆつくりと目が見開かれる。

その瞳がレイルを映した瞬間、大丈夫ですか、レイルと叫んだ。

その様子があまりにも切羽詰ついて、そして、些細な事に嫉妬していた自分にレイルは笑つてしまつ。

「僕は……本当に、貴方が死んでしまうかと……」

「ごめん、トール」

そんなトールにキスをして、首につけていた首輪を取る。もう、こんなものは必要ない。

レイルは決めたから。

「トール、今更だが、私の恋人になつてくれないか？」

「……その前に、『愛している』と言つてもらえませんか？」

ねだるようつに微笑むトールに、レイルは勝てないと苦笑して、

「愛しているよ、トール。だから私の恋人になつてくれ」

「はい。僕も貴方の事を愛しています、レイル」

そう、レイルとトリューカースは唇を重ねたのだった。

「僕には幼馴染の四人がいまして、その四人の誰かと子をもうけなければならなかつたのです。けれど結局四人とは出来なくて」
彼らはその時は優しくしてくれた。いや、そのときまでは優しかつたと思う。

結局、女性の魔族との間で子を産み、そして彼女にもそれだけの関係だからと言い切られた。

本当は彼女の事が、少しだけトリューカースは好きだつたからそれはとても辛かつた。

そんな、悲しそうなトリューカースをレイルは抱き寄せる。

「そうか、辛い事を聞いてしまつた」

「いえ……その後、その四人にそれでも愛していると軟禁されかけて、それ以来ずっと引きこもつていたのですが、貴方に惹かれて出て来てしました」

「そうか……その四人に報復を」

「……一応幼馴染なのです。昔からずつと遊んでいた……だから、酷い事をしないでください」

ただし遊んでといつたお願いをするたびに、彼らも自分の願いをかなえるよう要求した。

あの四人の誰と比べてもトリューカースは弱かつた。

それでも優しかつたのだ、昔は。

遊ぶ代わりにキスをねだられて、幾度となくそれをして。

決定的な亀裂は、彼らの別荘に軟禁されかかつた事。

「貴方が悪いのです。我々の四人の中から選ばなかつたから」

劣情と怒りと悲しみが入り混じつた声。

そこまで自分を何故求めるのか、魔物だから魔王に惹かれている、

ただそれだけのはずなのに。

そんな憂いだトリューカースび優しく囁きかけるように、レイルはいった。

「なら、これからのお前の未来は、私のものだ。もう誰にも渡しはしない」

「うん……」

レイルの盛大な告白にて、トリューカースは本当に幸せを感じて優しく微笑んだのだった。

予供せりひこよ（～）（後書き）

お気に入り、評価ありがとうございます。とても励みになります。
次回更新は、本日18:00となっています。よろしくお願ひいた
します

子供はつらじょ（3）

最終的に魔王城にたどり着いた。

暗雲漂う中、聳え立つ灰色の城はいかにも巨大な力を持つ魔物が、潜んでいるかのよう見えた。

ちなみにトリューカースの住居もある。

しかし、未だに本当の名前を告げる勇気がなく、トリューカースはトールという偽名を使っていた。

気が付けば仲間としても、レイルの恋人としても、レイルの仲間達の信頼を勝ち取っていた。

それが居心地が良くて、そして結局今回の魔王の件は四天王は関わっておらずそちらに行かずすんだことから、意外に短い期間でたどり着いてしまった。

中にいるのはカノン一人で、殺傷性の高い罠がある道が幾つもあるはずだった。

もちろんの事、その全ては城の主であるトリューカースも知っている。

気が引けるのは、城を空けすぎてカノンが怒っているだろうなどいう事と、恋人のレイルをどう紹介しようかという点である。

凄く怒られそうな気がする。

「トール、行くぞ。大丈夫、私が守るから、心配するな」

レイルが本当に優しくて、トリューカースはうんと頷く。そしてフードをより深くかぶつて、はたから見てトリューカースだと分からぬようにする。

カノンには悪いが、レイル達を殺させるわけにはいかないから。中に入ると、探査の魔法を使って、どの道が良いか分かるも、最後の三つの扉の前で迷う。

ここを通れば魔王の玉座の広間に着く。

けれどそれがどれか分からぬようだ。そしてあてずっぽうで危

険な道を行こうとするレイルを止めて、不思議そうなレイル達にトリューカースは微笑んで、どの道を行けばいいのかを教えたのだった。

レイルは、トールがまるで道を知っているかのような行動に出た事に、驚きを隠せなかつた。

「トール？」

名前を呼んでも微笑むばかり。けれど黒が無いことから正しい道だと分かる。

やがて大きな扉の前にたどり着く。

この先に魔王がいるのだろう。

レイルは大きく深呼吸して扉を開こうとして、扉が自分から開いた。

レイルが驚いたのはその後だった。

そこから、引きつった笑みの、トールにそっくりな、年はトールと同年代の見かけの頭に角を付けた魔族が顔を出したのだ。おそらくは魔王だろうと、レイルは見当をつける。

とつさにレイルはトールを自分の背に隠す。

何か言いたそうにトールはレイルの後ろでしていたが、それよりも早く目の前の魔王がレイルを指差して、

「那人から離れろ！」

と言つた。年が同じくらいに見えるという事は、彼がトールの幼馴染だろうか。

近い親族で婚姻を結ぶのは、貴族でも良くある事。つまり彼が、トールに酷い事をしようとした男か。

そう考えた瞬間レイルは、彼にトールを渡すまいと心に決める。

今にも飛び掛つて殺してしまいたい怒りを抱えながらレイルは、「嫌だね、お前の指図は受けない」

「何だと？」

言い返されると魔王は思つていなかつたらしい。

それはそうだろう、魔族の長たる魔王が人に指図されるなど、そんな滑稽な事があるとは思えない。

険を増す魔王に、レイルは更に続けた。

「そもそもあいつは俺のものだ」

その言葉に、目の前の魔物は酷く怒ったようだつた。

パクパクと口を開いてそれから一度ぎゅっと怒ったようになり口を結んでから、

「お前、お前は一体……」

「彼の恋人だ。他に何か？」

「何……だと」

驚いたような、衝撃を受けたような目で、トールを見る。だからそれに対してもか言おつとするトールの顎を捕らえて、レイルは唇を重ねた。

長くたつぱりと見せ付けるようにキスをしてから、レイルは魔王に向き直り、

「こいつは関係だが、何か？」

と聞き返す。

魔王は言葉も出ないよう、俯きながらわなわなと怒りで肩を震わせている。

それにレイルは優越感を感じた。その時は。

「……認めない」

「私はお前に認められなくてもかまわないが？」

その言葉に、俯いていた魔王が顔を上げる。

怒りで顔が真っ赤になつて涙目で。

あれ、この顔はどこかで見たことがあるよつたとレイルが思った

次の瞬間、

「お前なんか……お前なんかに……父様はやらない！」

父様と聞いて、レイルはトールを見た。

トールがばつが悪そうにレイルから目を背ける。

「え？」

レイルは、間の抜けた声を上げたのだった。

「改めて自己紹介を。僕は、前魔王のトリューカース、そして彼が息子の現魔王カノンカースです」

「……子持ち……しかも、前魔王……」

「黙つていてごめんなさい。でも、嫌われたくなかったから……」

「トール、いや、トリューカース……」

「ようやく、本当の名前を貴方に呼んでもらえた……嬉しい」

何処か甘い雰囲気の二人に割つて入つたのは、彼の息子、カノンカースだった。

「お・ま・え……認めない、僕はお前なんか絶つつ対に認めない！」

まさか子供だとは思わなかつたので恨み半分で挑発した事を、レイルは反省した。

反省したので懐柔しようにも、カノンカースは取り付く島も無い。

そこで、

「カノンと一定の条件の下で勝てば、言つ事を聞いてもらひますよ？」

「どういくことだ？」

「父様！」

焦つたようなカノンカースに、これは勝算があるかと思いレイルは問い合わせる。すると、

「もともと、今までの勇者は誰一人として魔王を倒せていないのです。力が強すぎて」

「でも、トリューカース、お前は……」

「僕は歴代最弱ですから、けれどカノンは普通の魔王と同程度の力を持っています。だから、レイル達が幾ら強くとも、カノンが本気を出せば一瞬で消し炭になつてしまふのです」

ちらりとカノンカースを見ると、胸を張つて偉そつた。

その子供のような仕草が逆に威厳の欠片もなくしていると、本人

は気付いているのだろうかとレイルは思つて、黙つておこうと決めた。それは良いとして、

「けれど魔王側の理由から人を滅ぼすのは都合が悪いので、ある条件の下で勝つたならば、封じられた、倒されたとして要求を飲むことになつてゐるのです。例えば、しばらくは人間達を襲わないようにさせるとか」

「なるほど、つまりそれで勝てば、魔王を倒した事になると同時に、トリューカースが私の恋人という事が子供公認になるわけか」

「…………」

「…………レイル、嬉しい」

「…………トリューカース」

甘い雰囲気になる父親達に、カノンカースが割つて入つた。

「まだ僕はその条件だと決めていない！」

そんなカノンカースに、トリューカースはそつと手を握つて、

「カノン、僕は、レイルの事が好きです」

「父様…………」

「だから機会を与えてください。駄目な父親のお願いです。だから

…………」

「父様は、駄目なんかじゃない！ 優しくて、綺麗で、だから僕は

…………」

守ろうと思つたと言おうとして、カノンカースは口をつぐんだ。父であるトリューカースが自分が弱い事を気にしていると知つていたから。

だから黙つて、そんな父が選んだレイルと言つ勇者を見つめる。確かに、極端なクズではなく、そこそこ人の悪い所もある、けれど優しい人間のようだつた。

戦いぶりも遠見の魔法で見ていたので、どういう人となりなのかカノンカースは知つていた。

その時、父がいることになど気付きもしなかつた自分が恨めしい。

けれど、父が本当にレイルといふと幸せそうだから。
だから、それを引き裂けない。悔しいが。

「分かつた、勝負の方法は、僕のこの角を奪うこと」
「それは直に生えているものでは？」

「何代か前の魔王が威儀をつけるために、付け始めて僕もそれにしたがつているだけだ。それで、どうする？」

「わかつた、それでいい」

頷くレイルの服を、トリューカースは引っ張つた。そして何かを耳打ちする。

「……そんなもので良いのか？」

「ええ、僕達魔王一族の変な呪いの様な物で」

「……分かつた」

早くしろと叫ぶカノンカース。

そして耳打ちされたように、それをそこら中にばら撒いて、本当にカノンカースは引っかかったのだった。

予供せつひこよ(ω) (後書き)

お気に入り、評価ありがとうございます。とても励みになります。
次回更新は、本日21:00となっています。よろしくお願ひいた
します

外より内の方が好きなんです

「何に引っかかったのですか？」

よし、早速カノンを使ってやろうと決めてレオンはレイルに問いかけた。すると、

「バナナの皮だ

「え？」

「どういうわけか、魔王の一族はバナナの皮が天敵らしい」

「……間抜けですね」

「そういうところも可愛いと思わないかい？」

「確かに」

レオンとレイルは話してみて、似たもの同士だと感じた。これは中々、お互い良き協力者となれそうだ。

「それで君は、やはり？」

「『想像の通りだ』と思います。ただし俺にはあの力は無いので、出来損ないですが」

「……そんな事は無いと思うが……所で、先ほどの話しさは参考になつたかい？」

「いえ、全然」

あつさり首を横に振るレオンに、レイルはおかしそうに笑った。
「そうだろうな、ただ、トリューカースがその四人　　というか四天王の魔物達ではあつたのだが　　に惚れられてた事は話したと思うが、もしかしたなら……」

「カノンに手を出してくる可能性があると？」

「ああ。それに元々全ての魔物は魔王を敬愛……強い恋慕のようなものを抱くものらしいから、それとは関係無しに襲いに来るかもしない」

「カノンは俺の嫁です。誰にも渡しません」

「そうそう、そのいき。カノンは本当にファザコンだから、トリュ

一カースに抱きついて見えない位置で、私に向つて舌をだしたり、
『将来は、父様のお嫁さんになる』とか言つて……』

聞いた瞬間、レオンの額に青筋が浮かぶ。カノンを俺の嫁発言しているだけに、レオンはカノンに關しては心がとても狭かった。
『分かりました。カノンが俺以外に目が行かないようにしておけばいい、という事ですね』

暗い光を瞳に宿しながらくくとレオンは暗く笑う。

そんなレオンにレイルは昔の自分を重ねつつ、彼の協力が自分にとつても都合がいいと微笑む。

『そうして貰えると助かるよ。けれど、君はカノンの何処に惚れたんだい？』

『優しくて気の強い所です』

『それは、見た目に一目ぼれしただけでは分からぬよ。君は一体何処でカノンに会つたんだい？』

レイルが探るようにレオンを見て、それがレオンにはおかしく感じる。

『この人は覚えていないのだろうか。

『以前貴方は、王都近くのシルスの村にいませんでしたか？ カノン達と一緒に』

予想外であつたらしいその答えに、レイルは目を瞬かせて、思い出したというかのように手を打つた。

『……ああ、あれが君か。そうか、それで……』

『多分カノンは覚えていないと思います。でも、俺はカノンの事があの時からずっと好きだったから』

『そうかそうか、あのやんちゃだった君が……あれ、お忍びで？』

『ええ、お忍びで』

『よく取つ組み合いの喧嘩をしていたものな。いつそつなつたんだい？』

『お忍びで一時的に来れなくなつた時告白したんです、一応。もつともはじめて見た時、貴方と一緒に一目惚れしたのですが関わつて

「いく内に、その内面に惹かれて……あいつ以上に惹かれる者に出会わなかつた事もあるのですが、ずっと好きだつたから、絶対欲しいと思つたから」

「そうか、それでかな。カノンがある時から特に私達に口を出さなくなつて、もともと人間に甘めだつたが以前よりも人間への考え方を改めたようだつたから。それに、忘れないと思つよ。カノンはその時の事今も覚えている」

「……その割には俺達を全力で半殺しにしてきたような」

「いや、力が強くとも、間抜けだから」

「そうですね、間抜けですものね」

それで済まされてしまつのも、カノンを見ていると納得がいく。本当にどうしてこう抜けているのか。そうそう、抜けているといえば、

「そういえばカノンが、キスを百回すると子供が出来るといつたのですが……」

「え？ 冗談……そういえば、トリューカースにキスするたびに、子供が出来るとか騒いでいたような気が」

「多分本気ですね……分かりました。俺が一つ一つ教えていきますよ」

「頼む。さすがにそれは不味いだらう。ああ見えて、百歳超えていりし」

百歳越えと聞いて、レオンは何となく悔しくなる。自分が追いつけないくらい年上なのが、何となく嫌だ。

そして、それほど年上にもかかわらず、あの状態とはレオンは思つ。

「何であんなに純真といつか……中途半端に無垢なのですか？」

「いや、色々あって引きこもりにトリューカースがなつて、カノンの先先代魔王が亡くなつてから、カノンが食料の調達やら、時には人間に扮してギルドに依頼を受けに行つていたらしい。トリューカースは果物しか食べないし」

「それで中途半端に人間なわけですね」

けれどそれならば、そこから切り崩していくのもありかもしだいとレオンが計算していると、

「それでもカノンは魔物だよ。トリューカースもそうだったが、そういういた衝動に駆られることがある。特に満月の夜や、好きな者の前ではね。君はカノンに意識されているようだから、気よつけた方が良い」

魔物だから気よ付けろ、確かに彼らの闇は光を求める、光に属する人間を襲う。しかし、

「でも貴方は無事ですか？」

それは矛盾だ。現に、彼はカノンの父に傷つけられることなく、そしてカノンに何かされるわけでもなく今レオンの目の前にいる。けれど、それにレイルは肩をすくめた。

「満月の夜は、その前日に私はトリューカースを襲つて、魔力の殆どを搾り出してしまったから。それに、トリューカースは偏食だしね。それで大丈夫なんだ」

「それでもカノンと一緒に暮らしていきなんでしょう？」

「……あいつ、私の事が本当に嫌いらしくて、満月の夜に出くわした時に舌打ちされた。どうも嫌い過ぎると逆に大丈夫らしい」

「それは……良かったですね」

「ああ、良かつたとも。だから、気よ付けろ。傷つくのはお前だけじゃない。カノンもなのだから」

「肝に銘じておきますよ」

「大体、話はこれでおしまいかな。君がどんな人間か分かつて良かつたよ。仲が悪いとはいえ、カノンはトリューカースの息子だから、気にかけていたんだ。そして、私も出来る限りお手伝いをさせて頂くよ」

「ありがとうございます。その時はよろしくお願ひします」

「ついでにもう一つ、面白い話があるが、聞いておくか？」

「え？」

レイルはそう、話したのだった。

いたずらっぽい笑みを浮かべてその事をレオンに

外よりの方が好きなんですか（後書き）

お気に入り、評価ありがとうございます。とても励みになります。

次回更新は、本日23:00となっています。よろしくお願いいたします

「カノン、久しぶりですね」
「父様！ 元気そうで良かつた！」
「ええ、レイルが色々と面倒を見ててくれますから」
そこでふいっとカノンは不貞腐れたよつこわっぽを向く。その様子は、昔から可愛いままだ。
そんな我が子の様子を見ながら、トリューカースは、「どうですか、一緒にいる勇者達は」
「レオンは変態だけど良い奴だし、イオもトランも、優しいし、とても良いパーティに潜り込めたと思います。ただ……」
「ただ？」
「ただ、最近ふと思つのです。彼らを危険な目に呑わせるのではないかと」
「それは、カノンの選んだ彼らが弱いと？」
「そんな事ありません！ 確かにまだ弱いけれど、これからきっと、もっと強くなります！」
「それならば、カノンが守つてあげればいいでしょう。カノンは僕なんかよりもずっとずっと強い力を持つてているのですから」
そうあたまをなせる父に、はいとカノンは素直に頷いた。
本当に穏やかで優しい気持ちになる。こんな父をおいて城から出てきたのは、カノンがある話を聞いたからだった。
「四天王の一人風の王の息子と会いましたが、特にその気配は無いよつに思えました」
「テーマだと？」
「いえ、まだ一つしか行きませんでしたから」
「……行くのを止めませんか？ 僕はカノン、貴方が何かされないか心配です」
「別にキスされる程度で特に何かをされたわけでは……」

そこでトリューカースがカノンの腕を掴んだ。

「帰りましょう。やはり、カノンをあいつ等に会わせる訳にはいかない！」

「ま、待ってくださいキスならレオンとも……」

そこで、トリューカースが足を止めた。そしてぐるりと本当ににこやかな笑みを浮かべて、

「カノン、そのレオンさんという人にもキスされたのですか？」「有無を言わせない、その迫力がある笑顔にカノンは危険を察知した。

だから話をそらす。

「そういえば、どうして父様は、キスを百回すると子供が出来ると嘘をついたのですか！」

「……どうしてそれが嘘だと？」

「レオン達から聞きました！」

「……余計な事を」

「え？」

「いえ、でも、カノンも一回城に戻っては？ それにもうカノンが危ない事をする必要が無いでしょう？」

「……父様、先ほどと言つている事が……」

「……飢えた野獣どもに、僕の可愛い可愛いカノンを渡してなるものか」

「えっと、父様？」

いつもと様子の違う父に、カノンは不安を覚える。けれどそれ以上にレオン達と一緒にいられなくなるとすると、胸が締め付けられるようだった。

「あの、父様。僕はもう少しレオン達と一緒にいたい……」

そんな熱心な息子の様子に、トリューカースはある事に気づいた。気付いたので、連れて帰ろうと思つた。だから、

「カノン、それほど強くなりそうな勇者ならいざれ魔王城に来るでしょう。その時手に入れるのは駄目なのですか？」「

確かに勝つにしても負けるにしても彼らを、特にレオンを手に入れることは可能だ。

勇者を手に入れた魔王など自分の前にも多々いる。

けれど、そういう手に入れたい、とは自分はちょっと違つ気がした。

「……一緒に居たいんだ。もう少し彼らと一緒に、馬鹿みたいにやり取りしたり、笑つたりしたい。こんな事、初めてなんだ」

「カノン……」

そこでトリューカースは思い出す。カノンは、自分と違ひ魔族とも交流なく魔王城に一人だけですと居た。

せいぜい誰かと接点を持ったのは、レイルと一緒にトリューカースが新婚のままごとをした時に、子供に化けて付いて来て、その時に他人間の子供達と遊んでいた時位だろう。

自分のせいでカノンのそういうた時間を犠牲にしていたとトリューカースは初めて気付いた。

そして今、カノンは彼らと一緒にいたいといつている。だから、少しくらいならばかまわないので？。

「……分かりました。もう少しだけ、けれど身の危険を感じたなら帰つてくるのですよ？」

「父様、ありがとうございます！」

「それと、満月の夜は気よつけるのですよ？ 彼らを傷つけないよう」

「はい、今までだつて大丈夫ではありませんか」

確かに今までは大丈夫であつたが、カノンはレオンという人間に惹かれている。

あの魔物の衝動、を抑えきれるだらうか？

「大丈夫です。それにそんな事をすればきっと僕が後悔してしまいます。それに、人間なんて食べる気もしません。昔から。父様だつてそうでしょう？」

「基本的にある一定以上の魔族は人間なんか正気の時は食べたいな

んて思いませんから アレは別ですけど

だから、大丈夫かもしませんね」

父親が納得してもらえて、カノンはほっとした。そして、満月の夜の衝動に不安を覚えるものの、大丈夫だと自分の力を過信していた。

以前に満月でもないのに、レオンの血を舐めとり甘く感じた事、酒を飲んでいた時、キスをしてレオンの魔力を奪い取った事。どちらもレオンだから、なのにカノンは気付かなかつた。

そこで、ふとトリューカースが思い出したかのように付け加えた。「そういえば最近僕達にそつくりな、赤い瞳の者が目撃されているらしいですよ？」

「……赤い瞳は、特に魔力が強いものの象徴ですよね。人にしろ、魔族にしろ」

「しかもバナナの皮に引っかかったそうです」

「……父様の隠し子ですか？」

「魔王は一代に一人しか生まれない、それは貴方も知っているでしょう？」

では一体誰なのかと考へて、それから、

「……世の中広いので、そういう人間もいるのでしょうか？」

「そうですね」

そしてちょっとした雑談をして、カノンはトリューカースと別れたのだった。

レイルはトリューカースと合流した。

「やはり、魔王カノンカースが目覚めたから、勇者の活動が活発になつたらしい」

「それと同時に四天王が動いて……動きが関連している？ カノン

……」

「だが逆に動く事で何か分かるかもしれない。城にいるだけではいざという時に対処できないかもしない」

「それでも野獣の中にカノンを放り込むなんて……」「会つて話した限り、レオンは紳士的だと思うが？」
「カノンにキスしたのに？」

「…………」

「その程度許してやるが、トリューカース

「でも……」

「私が傍にいる、それだけでは不満か？」

黙つてしまつたリューカースに、レイルは小さく笑う。本当に、
彼は寂しがりやだ。

それに、カノンだつてもう子供ではない。

そして、トリューカースもそれが分かつてゐる。認めたくないだ
けで。

そんなトリューカースを連れてレイルもまたその場を去つたのだ
つた。

宿に戻つてカノンは悲鳴を上げた。

「イオ、トラン！これは一体何！」

「何つて、お酒？」

「ああああ、しかも依頼量がこんなに減つて……どれだけ飲めば、
レオン、何？」

即座に依頼料の入つた袋を、レオンがカノンから取り上げた。

「ちょ、どうする気！」

「ぱあつと使うのさ、それではまた会おう、諸君！」

「ちょ、待て、レオン！ えつ！」

追いかけようとしたカノンは、何かを踏んで倒れこむ。
視界の端にはそれが黄色いバナナの皮だと分かつた。

ああ、またバナナの皮かとカノンは泣きたくなる。

本当にどれだけあのレイルとかいう父の恋人にバナナの皮で嵌め
られた事か。冷たい床は痛かつた。

そこで、カノンはレオンに抱きとめられる。見上げるとレオンが微笑んでいて、それにカノンは見惚れてしまう。

「いつだって、転んだら抱きとめてやるから」

「あ、うん、そう、そうだね」

「”幼馴染”だから」

そう付け加えるレオンが何となく面白くなくて、カノンはそっぽを向く。

それが運のつきだった。

「と、言うわけでさらばだ！」

走り去るレオンにしまったと顔色を変えてカノンが追いかける。そんな仲の良い二人を見送りながら、このお酒美味しいねとイオとトランが仲良く飲んでいたのだった。

常識的思考えて（後書き）

お気に入り、評価ありがとうございます。とても励みになります。

次回更新は未定ですが、よろしくお願いいたします

意味が分からぬよ

結局なんだかんだでレオンから依頼料を取り戻したカノンだが、半分に減つてしまつたその悲しさのあまり、次の日の朝早く開くと同時にギルドに飛び込んだ。

「すみません、何か依頼は……」

「無いよ」

新聞から顔を上げずに、タバコを吸いながら中年の男が足を組みつつ短く告げた。

けれど、カノンは更に食い下がる。

「……いえ、普通一つか二つ、あるものでは？」

そんなカノンを面倒くさそうに、見上げて言葉を失つたようだつた。

それからその男は小さく咳払いをして、

「昨日有名な勇者様が来て、全ての依頼をこなしてしまいしばらくそれ関係は……ああ、可愛い少年が宴会で女装して踊る依頼ならありますか」

「僕は可愛くないので無理ですね、それでは」と、カノンはきびすを返してそこから去りつとした。

そこで、嫌な人影を見つけた。

その人影も、カノンに気付いてものすごく嫌そうな顔をして、「ここにちは、卑猥な体をした人……カノンさんでしたっけ」と、カノンに喧嘩を売つたのだった。

「つまりそのような理由でカノンが女装をする羽目に？」

「油断した……まさかあの依頼が、奴らのものだつたなんて。しかも挑発に乗っちゃつて……何で僕は……」

そう、その嫌いな人影は僧侶、名前をイータといった。以前釘をさしておいたのに性慾りもなくカノンの前に現れて……それはいい

として。

ホーリイロウ達がちょっと楽しく宴会したいとの理由で依頼を出していて、そして僧侶のイータとカノンは気が付けば口論になつており、勝つた方がレオンを手に入れる事になつた。

単純に売り言葉に買い言葉で言い合いでいただけのはずなのに、とカノンは頭痛がする頭を押された。

しかもその経緯をイオに話したら、何故か笑い出して理由を教えてもらえなかつた。

ちなみにその時イオの頭に浮かんだのは、正妻と側室の骨肉の争いだつたのだが、賢いイオは思つただけで言わない。

それよりも、もつと面白いことが今進行していた。

レオンが荷物から洋服を取り出して、カノンの前で広げて見せた。「どれがいい？ フリルいっぱいのスカートに、胸元の開いた体のラインが丸見えな服、メイド服に、白衣に……」

「何故そんなものを持っている」

「イオの趣味だ」

あつさりとしたレオンのそんな言葉に、ジーとカノンはイオを見て溜息をついた。

「そんな格好で踊り子は踊るものなの？」

「ううん、踊り子をやつていてファンの人から、こんな服がありまつてプレゼントされたの」

「……深くは追求しないけれど、本当にどれにしよう」

「カノンちゃんはどれを着ても似合つと思つよ、そうでしょ、レオン」

「うむ」

「うむじゃないだろ！」とカノンは思つたが、似合つと言われたのは……嬉しくない、嬉しくないから、全然、嬉しくないから。

でも、どんな服でもいいのならとカノンは考えて、

「じゃあ露出度多目のものがいいかな？」

その途端、レオンとイオが黙つた。

カノンはまた自分が変な事を口走つたのだろうかと不安に思つ。とても冷たくて痛い沈黙の後、レオンが重々しく口を開いた。

「……カノン、『ごめん、俺が悪かったから、露出を控えよう』でも露出をしないと、男の妄想をわざと誘つていて、一見清楚に

見えるのに卑猥さを垂れ流しているような姿になるんでしょう？」

「……誰に聞いた？」

「え、僧侶のイータに」

「そうか、カノン、それは嘘だからな？」

隣でイオがうんうんと頷いているので、多分正しい。

そこで、熱弁するようにレオンが続けた。

「本当に口口くないのは隠されつつ体のラインが見えている事だからーーー」

「つまりその姿は口口いつてことだね。ありがとうレオン。君の犠牲は無駄にはしない」

一体どれだけレオンの事を見ていると思つていてるんだ、レオンがそんな事を考えているなんてお見通しさとカノンは思つ。

ちなみにイオはにまにまと、カノンとレオンを見ていた。

そして、何故ばれたとむせび泣くレオンを尻目に、ふりふりの口ングスカートのワンピースを選ぶ。

黒と白の服で頭にリボンのいっぱい付いた布と猫耳をつけるらしい。面白い服だ。

そして、カノンはプチプチとボタンをはずして服を脱いでいく。白くきめ細かい大理石のような肌が、臆面もなく晒されつゝとした所で、レオンが部屋から出て行つた。

「？ レオン、どうしたんだらつ」

「カノンちゃん、いつもレオンがカノンちゃんが着替える時部屋から出て行つたの知つている？」

「そういえば……でも男同士なのに？」

「白い肌が朱色に染まる所とか想像しちゃうからじゃない？」

「？ 意味が分からないよ」

「そんなカノンちゃんも可愛いけれど、早くそれ着てレオンに見せてあげなよ。きっと喜ぶよ？」

「そ、そ、そ、う、か、な、」

「うううと促して服を着せる。

胸に詰め物をするか考えて、貧乳はそれでアリだと気付いて、イオはあえて提案しなかった。

そして綺麗に仕上がったカノンはそれはそれはもう。

「レオン、入ってきたよ。カノンちゃん凄くいいよ」

「本当か！」

勢いよく部屋のドアを開けて、レオンは絶句したようだった。開いた状態で少し立ち止まって、じつと無表情にカノンを見つめる。

その視線が何処か恥ずかしくて、顔を赤らめてカノンは俯いた。すると無言でレオンはカノンの目の前にやってくる。

その威圧感がいつもと違う事に気付いて、カノンはレオンを見上げた。

「レ、レオン？」

その声を合図に、いきなりレオンはカノンの服を脱がし始めた。突然のレオンの行動にカノンは固まるも、すぐに抵抗する。やめてと暴れるたびに、長いスカートがめぐれ上がり、カノンの白い生足が太ももまで露になる。

けれどレオンはそんなカノンの抗議が耳に入らないかのように、黙々とフリルのついた服を脱がす。

何処かいけないような気分になりながらカノンは、レオンの体を押しのけようとするもびくともしない。

着々と黙つて、レオンはカノンの服を一枚、また一枚とはいいでいく。

カノンの白い肩が、興奮しているせいか少し赤みを帯びていた。

そんなカノンにレオンは終始無言のまま、ズボン以外、いつもの服に着せ替えさせた。

「レオン、酷いよ。せっかく着たのに」

「俺がやる」

「え?」

「俺が女装する」

どうしてレオンがそんな事を言つのかカノンは分からぬ。

戸惑うカノンの様子を見ながら、レオンがどういった心中なのか察して、イオは一人面白そうににまにましていたのだつた。

意味が分からぬよ（後書き）

お氣に入り、評価ありがとうございます。とても励みになります。

明日辺り、web拍手を更新できたら良いなと想っています。

次回更新は未定ですが、よろしくお願ひいたします

「何故レオン様が女装をしているの…」

僧侶イータの第一声はそれだった。

そしてカノンもそう叫びたい気持ちが非常に良く分かるのだが…。

「でも、似合つていいんだ。仕方が無いんだ。僕は悪くない」

本当に驚いた。レオンに服を着せて、というか先ほどまでカノンが着ていた服を着せて 身長差があるので少し足がカノンのときよりも露だが 上品な綺麗なお嬢様というか。

そんなレオンを見て、その美しさのあまりカノンはレオンを見上げたまま惚けてしまった。

レオンはそんなカノンに真っ先に歩み寄り、そのままキスをした。

「！ 何を！」

「いや、見とれているようだつたから、こんな美しくて綺麗な女の子がカノンは好みなのかなつて。サービス？」

「いらない、そんなサービスいらないから！」

「じゃあ、この格好でその依頼をやればいいんだな？ 踊るんだつたつけ？」

そこでカノンが少し迷つたように一度目を伏せてから、

「……やっぱり僕が女装を…」

「え？ 嫌だよ。俺、この格好気に入つたし」

「……僧侶のイータとかも、レオンの格好を見るんだよね」

カノンが何を言いたいのか、どんな気持ちなのかをレオンは分かっている。

分かつていて揺さぶつている。

だから、わざとカノンの気持ちに気付かないようにレオンは続けた。

「そうなるな。ホーリィロウ達もだがな」

「……やつぱり僕が着る！ だからレオン、その服も僕に……」
けれどその言葉に、うんとレオンは頷かない。

今カノンが持っている感情は先ほどレオンが持ったものと同じ。
それが何なのかを、レオンはカノンに一つ一つ気付いてもらわな
いといけないから。

気付かずには必死になつて、僕がやると言つているカノンもそれは
それで可愛いとレオンが思つてるのは別として。

現在、レオンだけが女装して依頼を受ける事は確定したかのよう
に見えた。

但し、ここには悪戯っ子が一人。

「なら、カノンちゃんはこっちのメイド服にする？」

レオンとカノンの二人が、えつと言つ表情でイオを見たのだった。

「ふーん、メイド服ね。一体どんなご奉仕をするんでしょうね」

「ご奉仕、という言葉をとげとげしく大きな声でイータは強調する。
その意味はカノンには分からないが、僧侶のその格好に一言文句
はつけてやる。

「ははは、僧侶のお前は何だ？ 白い文物の服、それ結婚式に着る
服じゃないのか？」

「レオン様と一緒に腕組めば、それっぽい気分が味わえると思った
のに」

「面白い冗談だな。似合わないにもほどがある
「使人風情が、何を言つているんだか」

「…………」

しゃー、と牙をむき出しで威嚇しあう二人。それは傍から見ると
微笑ましく可愛いものに見えたのだが。

機嫌が悪そうなレオンに、イオは話しかけた。

「レオン、怒つている？」

「……怒らないと思うのか？ あんな可愛いカノンが、他の奴らに

見られて」

「でも考えてみようよ。だつて普通のフリルの服とメイド服の2種類のカノンちゃんが見られたんだよ！」

「それは、そうだが……百歩譲つて他のやつらがカノンを見るのは良いとして、あいつ、ホーリィロウにこんなカノンを見せたくない

「恋敵だから？」

「……答えたたくない」

珍しくレオンの歯切れが悪くて、イオはあれつと思う。

そういうえばこの前も知り合いのようではあったのだが、イオはレオンがホーリィロウとどのような関係なのかを知らない。

有名な、とても強い勇者様。今一番有望株で、魔王カノンカースを倒すのも彼だと噂されている。

そんな勇者が、無名というか、変な噂の多いレオンと知り合いというのは、不思議だ。

ただそれを言つてしまつと、レオンはカノンが着てから明らかに自分を弱く見せる努力をしているが、レオンがあれほどの強さで無名というのもおかしな話だつた。

未だにイオはレオンが本当は何者なのかを知らなかつた。

そこで、かの勇者様、ホーリィロウがにこやかに告げた。

「その女装対決、僕も出ようかな？」

買出しから戻ってきたトランは部屋を開けて一言。

「誰もいない……」

その机の上に、書置きがある事に気がつくのは、その30秒後の事だった。

出遅れたでござる（後書き）

お氣に入り、評価ありがとうございます。とても励みになります。

web拍手を更新したのでこちらもどうぞ

次回更新は未定ですが、よろしくお願ひいたします

フリフリの貴族が普段のパーティで着てはいた豪華なレースのドレスを、ホーリィロウを着て、残念だが非常に似合っていた。そんなホーリィロウに、若干引きつつレオンが問い合わせる。

「何でそんな服を持つているんだ？」

「行く先々で綺麗なお嬢様方に、『ぜひ、ぜひ、着て頂きたいです！』『きやーーーーーー』と言われてね」

「……その事に疑問は？」

「女性には優しく、が僕のモットーなんですよ？」

「そうですか、さすがは王テる勇者様は違いますね、じぶつぶつと呟くレオン。

そこで、ホーリィロウの仲間である戦士が少し小さめの花の入った花瓶を持ってくる。

そして、そのままホーリィロウの頭に乗せた。

「……何をやつているんだ？」

「この前助けた、クレメンダ領のマリー、マリー・アントワネットお嬢様からこのような花瓶を頭に乗せる髪型が流行っていると聞いたので試そうかと」

「やめろ、さすがにそれは無い」

「無ことは思つたけれど、そういう髪型も意外に面白いかなと僕は思つたが？」

「……何で昔からそういうセンスだけは斜め上なんだろ？な、お前は……」

いつも振り回す側のレオンが珍しく溜息を付く。

そこで、ホーリィロウの仲間の魔法使いが、

「あのー、前回もそうですが、レオン様？、は我等が勇者様と同じようなご関係で？」

それはイオも気になっていたので耳をそばだてて様子を見守る。

「やにやとホーリィロウは笑い、一方レオンは氣まずやつに手を背けて、

「……前回が初対面だ」

「いえ、ですが……」

「ほら、魔法使い。レオン様がそう言つてゐるのならばそつなのだろつ」

さりげなく様付けで名前を呼ぶホーリィロウに、レオンは苦虫を潰したような顔をする。

残念とイオは小さく心の中で思つた。しかし、レオンの素性が気になつたが、いざれは分かるだろうとイオは樂観的に考えた。

そして、あまり会話したくないといつかのようだに、レオンはカノンの傍に歩いていく。

心なしか憂鬱そうで、いつもの明るいレオンからは想像をつかない。

一方、未だカノンと僧侶のイータは、シャー、と相手を威嚇しあつていた。

そんなカノンをレオンは後ろからぎゅっと抱きしめる。カノンが固まつた。

「え、えつと……レオン？」

「ちょっとカノンを補給する」

そのままレオンはカノンの首筋に軽くキスをする。

カノンの顔が真つ赤になつて、引き剥がそつかどうしようかとわたわたとしてから、そつと安心させるようにレオンの手に自分の手を重ねた。

しかしどちらも女装しているので、百合カップルのよつに見えると誰もが思つた。と、

「レオン様！ 僕だつてレオン様を癒す事が出来ます！」

「……いや、一応僧侶だから、神様に仕える人にそういう事しちゃいけないだろ？」

「大丈夫です！ 愛さえあれば、大抵の場合何とかなります！」

必死に抱きついてこようとする僧侶のイータを絶妙な距離に逃げつつ避けるレオン。すると、

「カノン……あれ、どうした？ 肩を震わせて」

カノンが顔を上げ、満点の笑みを浮かべて、
「レオン……僕が、魔物とのハーフだからって、好きなように体を弄んで良い訳じやないんだからな！」

「別に、気持ち良くなかったんだから良いだろ？」「

「気持ち……確かに、ちょっとレオンの体温が伝わって気持ちいかなと思つたけれど！ それとこれとは話は別だ！」

素で告げるカノンに、今度はレオンが恥ずかしくなる。
珍しく頬を赤らめるレオンに、カノンは珍しいなと思いつつ見詰めていた。

そして取り残された僧侶イータが、そんな二人が気に食わないので何かを言おうとして、ホーリィロウに遮られた。

「それじゃあダンスをする組はくじ引きでいいかな？」

とりあえず全員が社交ダンスしか出来ない事が分かつた。
「それで、俺とホーリィロウ、カノンと僧侶のイータになつたわけだが……そこ、喧嘩するな」
再びカノンと僧侶のイータは、シャー、と相手を威嚇しあつていた。

そして言つても止める気配が無い。と、

「仕方ありませんね、では、レオン様が女性役といつ事で。僕は男性パートしか踊れませんから」

くるつと、カノンがこちらを向いた。微妙そうにレオンを見て、ホーリィロウを見て、再び何かいたそうにレオンを見る。

レオンは自分が嵌められた事に気づいた。

「ホーリィロウ、そういうアピールの仕方はどうかと思ひ。俺を男役にさせろ」

「レオン様は女性パートしか踊られたことが無いはずですよね？」

「……知らん。カノンの前では、幾ら……」

「貴方様といえど、僕は仕えるべき主と獲物の区別は付けているつもりですの」

「……後悔するぞ?」

「実力で示せば構わないでしょう。そもそも、そちらの方の手腕も僕にはあることはお忘れで?」

「どちらも女装しているんだし、どちらのパートを踊つたとしてもアピールにはならないだろう?」

「ではこのまま構わんですね」

本当に扱いづらい、とレオンは心の中で思つ。昔から二つはそうだった。

そして本気でカノンを獲物として取りに来ている。

理由は、どれなのかが分からぬ。単純に見かけに惹かれただけなのか、別の理由があるのか。

そう、カノンが……。

レオンはホーリィロウの事を昔から知つてゐる。

それ故に、彼がどれほど魅了に長けているのかを知つてゐる。取られたくない。

たつた一つだけどうしても譲れないそれを奪われたなら、レオンは自分が狂うのではないかと思つ。

ずっと焦がれて、追いかけて、けれど無理かもしれないと思いつがら忘れられなかつた彼。

そこで、カノンがレオンに近づいてきて、レオンの頬にキスをした。

自分からなんて珍しいとレオンは思つてゐると、そのままカノンは真剣な表情でにっこり笑つた。

「勝て、レオン」

短い言葉。けれど、それだけで十分だつた。

レオンはホーリィロウに向き合つて、自信を取り戻したかのよう

に笑う。

「いいだろう、お前には負けない！」

そんな様子にホーリィロウは焼けますね、と呟いたのだった。

愛は全てを救つ（後書き）

お氣に入り、評価ありがとうございます。とても励みになります。

氣よつけで 気を付けて、ですね。指摘して頂きありがとうございます。これでいました。本当に気が付けばそういう癖がついてた。いつ付いたんだろ？……記憶に無い……。

また、この話をお記…すびばるにも投稿するかもです。

明後日から冬休み…私は体調不良で自宅待機です。遊びに行きたかったお。代わりに、連日更新できたらなと思っています。『』で並んでこる間の暇つぶしにでもお楽しみくださいませ。

次回更新は未定ですが、よろしくお願いいたします

思い通りにする方法（笑）

レオンとホーリィロウが踊りだした時、まわりは騒然となつた。とはいっても、ホーリィロウとレオンの仲間しかいなかつたのだが。ふわりと緩やかにスカートの舞う様も、本当にレオンの柔らかな美しさを引き立てている。

色々な意味で巧みに踊つていぐ一人。自然とカノンの目が険しくなる。

だがそれがレオンの踊りの技術の高さを示している。

けれど、これほどまで女性パートをレオンが上手く踊りきつてい事に、カノンは面白くないものを感じた。

一人が上手いと余計にそれを感じる。

「やはり我等が勇者ホーリィロウ様は素晴らしい。文武両道、そしてあの容姿……どれをとっても完璧な方で、しかもこのように踊りも上手いなんて！あ、でもレオン様も本当に綺麗ですね……周りに光のかけらが振りまかれているように煌びやかで……ああ、くらくならする」

目を輝かせながら、アイドルを見て騒ぐファンのようなその様子の僧侶イータを見て、カノンは自分が彼に抱いている嫌なものの正体が、もしかしたら違うんじゃないかな？、という事に気付いた。なので、楽しそうな僧侶イータを少し観測してからカノンは口を開いた。

「……僧侶イータ。僕は今のお前の発言で何か色々と間違えている気がしてきた」

「む、可愛いだけの貴方に何が分かると言つんですか

「……喧嘩を売つてているのか？ 僕に」

「売つてるんですよ、僕は。言わせないでください、恥ずかしい」
カノンと僧侶のイータは、シャー、と相手への威嚇を再び始めたのだった。

視界の端で、カノンと僧侶イータが喧嘩しているのをレオンは確認した。

あの二人、その不和の原因がレオンだと呟つのは別に良い。それだけカノンがレオンの事を気にしている、という事なのだから。

少しレオンはにやけていたのかもしれない。それに気付いたホーリィロウが、周囲には届かない程度の小声で、

「やけに嬉しそうですね」

「ああ、カノンが俺の事を気にしているみたいだからね。さつきは勇気付けてくれたし、自分からキスもしてくれたし」

「僕は惚気られているのかなつ……と」

そう右足を踏まれそうになつたレオンは巧みに交わして、踊りながら小さな声で会話を続ける。

「さつきから、わざと俺が踊りにくいやうに動いてるのは酷いんじゃないか?」

「カノン君が見ているのだから僕も少し本気を出やうかなと」「そういうつた相手を貶めて自分を良く見せよつとする方法でなく、自身の動きで魅せようと思わないのか?」

「足を引っ張る方が楽なのですよ?」

「自分で成長する方が大切だらう?」

「レオン様は、心が強いですね」

「お前は実力で押していくほうだと思っていたが?」

「さて、何のことでしょう。……それにこの程度の嫌がらせは、分かりにくいやうにやるものです。現に、誰も気付いていないでしょう?」

そう、ちらりと回りの様子を見るホーリィロウ。

カノンとホーリィロウの目が合つて、カノンの目がすつと細くなり、声を出さずに口を動かす。

”セイセイドウシヨウブシロ”

カノンにはばれていた。

「どうしよう、本命のカノン君に気付かれてしまった。……彼、魔物なのに、人の踊りが分かるんですね」

魔物だと言うホーリイロウにレオンは訂正を入れる。

「……カノンは魔物とのハーフだ。それにカノンは、抜けているけれど、本当は強くて賢いよ。もつとも踊りは昔、俺がカノンに教えたけれどね」

「……レオン様、カノン君と幼い時に？」

レオンは口を滑らせたと舌打ちする。

「こつそり昔カノンに会いに行つっていた事など、出来るだけ知らないようにしないといけなかつたのに。」

つい、ホーリイロウに張り合つて、あまり知られたくない情報をしゃべつてしまつた。

「そうですか、やけにカノン君に執着すると思つていましたがそのような……けれど、彼は魔物でしよう？」

「”幼馴染”だから何かを教えあう事もあるだろう？」

「あの姿の人間で不審な人物と接触したという話は、僕もレオン様と古い付き合いですが聞いた事が無いですね？」

「……カノンとは、俺が子供の時からの幼馴染だ」

「レオン様はそれを本気で言つてはいるのですか？」

今度は探るようにレオンから言葉を引き出そうとするホーリイロウ。

確かにその辺は彼ならば気になるだろう。

だが、記憶操作されていると誤解されている方が都合が良い場合がある。今回はそうだ。

「子供の時のカノンは本当に可愛かつたぞ？ 本当に可愛らしくて神々しい子供だった」

「……羨ましいですね。そして、カノン君は貴方に惹かれていると？」

「さつきの行動で察して欲しいな」

珍しく真剣に、ホーリィロウは悩む表情をレオンに見せた。そして、

「……僕も幾つか考えなければいけないようです」

大体ホーリィロウが言いたい事がレオンは分かつたのでけん制しておくる。

記憶操作されているのなら、そんな状況ではカノンと一緒にいさせるのは危険だからとレオンは連れ戻されてしまうだろう。

特に、ただでさえ無理を通している今の状況では、良い口実になつてしまつ。

例えレオンがカノンを抑えていた側面があつたとしても。

レオンは……だから。

それにレオンはまだカノンを手に入れていない。良いとは言えない奇跡のような偶然とはいえ、一緒に旅が出来ているのだからこの機会をレオンは逃したくはなかつた。だから、

「今俺をカノンから引き離すと、カノンは助けに来るだろ? なー」

「……それは遠まわしな脅しですか? はあ、しばらく様子見ですね……」

「そのままカノンの事を諦めてくれると俺は嬉しい」

「僕は彼を獲物と決めましたから。例えレオン様でも譲れません」

きつぱりと言い切つた所で、踊りを一人は終えたのだつた。

思い通りにする方法（笑）（後書き）

お気に入り、評価ありがとうございます。とても励みになります。
次の更新は、12/29 午前6:00頃出来たらいいなと思つて
いたりします。間に合わなかつたらごめんなさい。
よろしくお願ひいたします

踊り終わった途端に、レオンはカノンへと走りより抱きつこうとする。

だがさつとカノンは避けた。盛大に転ぶように、レオンが転ぶ。レオンが恨めしそうな声を上げた。

「カノン、抱きとめてくれたって良いじゃないか」

「レオンの方が背丈も体格も大きいのに、抱きとめられない。そもそも、そんな事をしたら僕が床に倒れて痛い思いをするじゃないか」「がんばった俺に」褒美としてそれくらい良いじゃないか

「わかった。じゃあ僕がレオンに抱き付けばいいんだね？」

そう言つてカノンはレオンに抱きつくという名の、飛込みをしようとした所で襟首を掴まれた。

「使用者、レオン様は戦利品だ。どっちが勝つかで、決まるんだ。分かつてる？」

「使用者言つた！ それにレオンは今はそちらのものではないから、僕がレオンに抱きつくのは問題ないね。そもそも、渡す気も無いけれど」

「ふん、約束は守つてよね、カノン」

「そもそも今ので、僕達の勝ちがまず一つ決まった。そういう、ホーリィロウ」

「……聞こえていたのですか？」

困つたように笑うホーリィロウに、カノンはつまらなそうに続けた。

「少し魔法を使って会話を聞かせてもらつていた。お前が、レオンが踊りにくいよう仕掛けているのが分かつたから」

「そうですか、これは貴方に嫌われてしまいしますね」「元々何とも思つていない。そしてこれからも」

冷たく言い放つカノンに、ホーリィロウは戸惑つたように目を瞬

かせた。

「僕には一切興味が無いと？」
「自意識過剰なのでは？」

ホーリイロウが本当に困ったような表情をする。それはそうだろう、とレオンは納得する。昔から多くの人間を魅了し、羨望の眼差しを受けていた彼が眼中に無いと言われたのだから。

「これは難しい問題に当つてしましましたね……少し気長にやつていきますか」

「何の話だ？」

問いかけるカノンに、ホーリイロウは少しじつとカノンを見て何かいいたそうにしながらも、僧侶のイータに視線を移して、「いえ、それでは今回は僕の負け。イータ、がんばってください」「はい、ホーリイロウ様……よし、いくぞ」

やけに張り切るイータに、こんなずるい奴にどうして付いて行くのか、とカノンは心の中で疑問に思つたのだった。

「じゃあ僕が女性パート、使用人が男性パートでいいね」

やけに偉そうな僧侶イータに、カノンは何処か面倒そうに、

「僕は使用人じやないと、何度も言つたら分かるんだ。この鶏頭、三歩歩いて忘れるのも大概にしろ！」

「アーアー聞こえない。……でも、レオン様をくれたら、カノンつてきちんと呼んであげる」

「全力でお断りする！」

「交渉決裂だね。早速、いきますか！」

そう、僧侶イータと向かい合つてカノンは思い出す。

そういえば人の踊りは、子供に化けていた時の金髪の少年に教わつたのだ。

設定上同じ年の少年はカノンよりも背が低く若干力も弱かつた。確かに、勝つた方が一つだけ言う事を聞く、という約束で教えても

らつたのだ。

カノンが男役で彼が女役。

そういうえば、やけにあの時かの少年が顔を赤らめていた気がするが、まあいい。

「それではよろしく」

そこでカノンは恭しく、僧侶のイータの手の甲にキスをした。全員が固まつた。

そしてレオンは嫌な予感と共に昔の記憶を思い出す。

男性パートを教えたとはい、今なら分かる。彼は魔族の王。故に王としての威厳も、雰囲気も持つているのだと。

現に、その洗練された、いつもの可愛さや甘さがなりを潜めた堂々とした自信に満ち溢れた姿は、まさしく”王”そのものだつた。その様子に幼いレオンはどきどきすると共に悔しさを覚えていた。あの時から既にレオンは、カノンの事をお嫁さんにしてみたいと思つていたから。

そのまま呆然とする僧侶イータを抱き寄せて、踊りの形にする。そしてふつと微笑みかけると、僧侶イータがこれでもかといつくりい顔を赤らめた。

レオンはとてつもない不安を覚えてホーリィロウを見ると、彼も似たような表情をしていた。ついでに僧侶に思慕を寄せている戦士を見ると、完全に凍り付いていた。

そのまま踊りだす二人。

どちらも非常に良いのだが、何となく僧侶が恋する乙女のよつてカノンを見ているのは気のせいか。

そしてその懸念は当る。

踊りが終わつた途端、僧侶イータがカノンに抱きついた。

「抱いて」

即座にレオンとホーリィロウが一人を引き剥がした。そこで、僧侶イータが抗議の声を上げた。

「ホーリィロウ様、綺麗だと思ったから抱きついただけなのに、酷

いです」

「僧侶イータ、都市で、綺麗な男を次から次へと追い掛け回して、謹慎になつたでしよう？ そもそも、この旅で、少しでもその行動的な面食いの性格を直そつと、大人しくしていたのではないですか？」

「……忘れてた」

「……いえ、僕の責任でもあります。レオン様と接触させた事が間違ひだつた」

「いや、レオン様も好き！ それにカノン様も好き！」

カノンが気味の悪いものを見たかのように、一方後ろに下がつた。そこで背後にいたレオンに当る。

見上げるように見ると、レオンがそのまま腕を前に回してカノンに抱き喰いた。

「カノンは可愛い”幼馴染”でいてくれ。でないと……」

やけに真剣な表情をしたレオンが続きを言おうとして、そこで部屋のドアが開いた。

「ここか！」

トランが、顔を真っ青にして飛び込んできたのだった。

奴も男だ（後書き）

お気に入り、評価ありがとうございます。とても励みになります。

次の更新は、不明ですがよろしくお願ひいたします

見えそうで見えない

「レオンとカノンが女の子になつたつて……」
息を切らしながら、血の気が引いた顔でトランが飛び込んできた。
そんなトランを見て、イオが思い出したかのよう「ほんと手を打つた。

「そういえばそんな書置きをしてきた気がする」

「イオ……カノンならまだしも、俺がなるわけ無いだろ？」

「レオン、僕ならまだしもってどういう意味？」

「……どういう意味か教えてやろうか？」

「え？」

そのまま、先ほどと同じ真剣な表情で、レオンがカノンの顎を手で掴み上に向かせてそのままゆっくりと唇を近づける。

カノンはそんな真剣な表情をしたレオンから目が離せない。

近づいてくる時間が、本当に長く感じられて胸がどくんと大きく音を立てている。

おかしい、こんなの。

一方的にレオンに主導権を握られて。

こんなに心が乱されて、顔が沸騰しそうに熱くて、逃げ出したいような逃げたくないようなそんな。

「何だ女装しただけか」

トランのその声に、カノンははつと我に返る。

そして逃げるよつに、レオンの手をはずして距離をとり、イオの後ろに隠れた。

「あれ、カノンちゃん、そのままキスされちゃえばいいのに」

「……なんか、いつも以上にレオンが……その、何というか」

そこでイオがにまーとイオが悪戯をしてやろうとこう顔で笑つた。

「それはね、カノンちゃん。レオンが女装しているからだよ」

なんか変な話の流れにされそうな予感を覚えて、レオンがイオの

口を手で封じようとする。だが、それよりも早く、

「レオンみたいな女の子ってカノンちゃん凄く好みじゃない？」

カノンがじつとレオンを見た。

見て、次の瞬間顔を赤らめて、そこから逃げ出そうとした。

そんなカノンをレオンが腕を掴んで引き寄せる。

「……逃げるなよ、カノン」

「う……だつて、レオンが綺麗ですっ！」
「女の子だったら好みで、だから……」

「俺も、カノンが女の子だつたら凄く好みだ」

「そう……なんだ」

レオンに、カノンが女の子だつたなら凄く好みだと言われて、嬉しいよりも何となくがっかりしたような寂しい気持ちになり、何で僕がこんな気持ちにならないといけないのだろうと頭にきた。

「ふん、僕は男でした、残念」

「ははは、俺も男だけれどな？」

「……それも残念かな」

「なのでカノンには、スカートを少しめくつてもらおうと思こます」「何でだ！」

カノンは嫌々と、レオンから逃げようとして、けれど目を輝かせたレオンがカノンの目に映る。

「いや、そういうのつてこういうべきじゃないか？」

「もういい。この変態紳士、絶対に許さん。じわじわとレオンを……」

…

「勝った！」褒美

「男のそんなのみたつて楽しくないだろ？、常識的に考えて」

「男なら恥ずかしくないもんな、男同士だし」

「……なんかレオンが言つと、ものすごく嫌な気持ちになる……」

レオンがショボーンとした顔のなる。

それを見て、カノンは悪い事をしたような気になる。

そもそもこの女装対決だつて、カノンの思慮の足りなさが招いた

事なのだ。

なのに、初めはそれを理由は分からぬがレオンがやるうとして。そして結果としてこうなつてしまつただけで、レオンが勝つた事には変わりはなくて。

やらなくて良い事に巻き込んで、勝てとお願いしたのはカノンだ。だから、少しくらいはお願ひも聞いてもいいんぢやないだらうか。それをレオンが望むのならば。

「……分かつた、少しだけだから」

「「「おおーーー」」

レオン以外にも、何故かカノンを見て目を輝かせているイオやら、ホーリィロウ達全員。よく見ると、寡黙なトランまでも、何かおかしい。

選択を間違えたようにカノンは思うが、ここまで期待されたるにたえないといけない気がする。

全員、死んでも良いよもつ……と、心の中で毒づきながらカノンはスカートのすそを両手で摘んだ。

ニーソなるものを見ているので、肌が直接露出しているわけではないので、恥ずかしい事も何も無いはず。

そろそろと、スカートをめぐりあげていく。

とりあえず膝の辺りで止めると、何故か非難のまなざしでカノンは見られた。

「確かにそのニーソは一番上の所にレースがついていたはず! そこまで!」

「もういいレオン、踏んでやる、ここのーーこのーー」

「ああ、何といつづけ褒美」

「……痛くするぞ?」

「調子に乗りました、『めんなさこ』でもそこまで上げるのって、ミニスカートなら良くある事だと思つんだ」

「……普通はそれくじらまで、上げるものなの? 上げてもいいものなの?」

「そろそろ、だからちょっと上げてみて」

周りを見ると、レオンの言い分はもつともだと誰つかのようになら全員が頷いている。

随分世の中、けしからん事になつてゐるなとカノンは思いつつ、再びそろそろとスカートをめくつていく。

そして、ようやく足の肌が見える所まで上げて、何故かカノンは酷い羞恥心を感じた。

別に見ているのは同性で、それほどおかしい事は無いはずだ。なのに、もの凄く恥ずかしいのはきっと、

「……下着、穿いていないんだ」

カノンがそう呟いた瞬間、レオンがカノンのスカートを一番下まで下ろした。

「だめだ、それだけは駄目だ」

「レオン？」

「……カノン、何で下着を着けていないんだ」

「え？ だつて、女物の下着なんて恥ずかしくて付けられない」

レオンがイオを見た。

この服の組み合わせはイオによるものである。つまり、イオが……。

「だつてカノンちゃん、女物なんて穿けないからこのままで良いつて自分一人で納得して行つちゃうから……」

「そうか、カノンの自業自得か。それなら仕方が無いな」

うんうんと頷き、それから疲れたようにレオンがため息を付く。ため息を付きたいのはカノンだつた。本当に恥ずかしくて、でも、レオンがその瞬間隠すようにしてくれたのはちょっと嬉しい……くないわけでもないかもしね。そこで、

「それで、君達が勝利したわけだけど、宴会としての楽しさは薄れてしまつたね」

困ったように、ホーリィロウが口を挟んだ。

その目には何か企みがあるかのように揺れて、イオを見た。

それを見て、イオが意図を汲み取りにやりと笑う。

「その宴会に僕達も参加させてもらえるなら、プロの真髄を見せち
やうぞ」

「というわけだが他の皆はどうする?」

皆の答えは、既に決まっていたのだった。

見えやつ見えない（後書き）

お気に入り、評価ありがとうございます。とても励みになります。

次の更新は、不明ですがよろしくお願ひいたします

全てには理由がある

カノンは、酒樽に放り込まれる前に逃げ出した。何でも屋根の上でお月見をするらしい。

また、イオも含めて良い感じに酔っ払った所で、酔っていないホーリイロウが寄ったふりをしているレオンに近づいた。

「隣、いいですかレオン様」

「……ああ」

手にしているグラスは、ウイスキーだとレオンは言い張っているが、先ほど紅茶を放り込んでいたのをホーリイロウは見ていた。とりあえず沈黙しつつ、飲み物を飲んでホーリイロウが口を開いた。

「……遊びかと思ったのですよ

「え？」

「カノン君の事、彼は……」

ホーリイロウが周りを見回して、聞いている人間がいないことを確認してから、

「魔王です」

なるほど、珍しくホーリイロウが踊りの時に妙な小細工をしてくると思ったら、そういうこととかとレオンは嘆息する。

ホーリイロウは、レオンが本気でカノンが好きなのかどうかを探りを入れていたのだ。

そして、今話しかけてきたのは忠告の意味もある。

だからレオンはきつぱりと頷いた。

「知っている」

「では、そんな彼に本気になっている、という事ですか？ レオン様は」

「……父上達には言わないでほしい」

「……その父上からのご命令なのですよ？」 探りを入れると

「俺は、カノンが欲しい」「奇遇ですね、僕もです」

レオンは黙ってしまう。

確かに、ホーリィロウはとても優秀な勇者で、古くからの付き合いのためかその過去の勇者が、本当は今までどのように扱われてきたのかを知っている。

それ故に、憎みこそすれ、欲するなど考えが及ばない。

「……お前、魔王だぞ？ 敵以外にどんな感情をお前は持つているんだ？」

「昔、彼に助けられた事があるのですよ。彼は覚えていないでしょうが、人のふりをした彼にね」

それを聞いて、何となくレオンは分かってしまった。

カノンは魔王としての顔の他に、カノンの個人としての顔は、気が強くて、優しくて。

それにレオン自身も惹かれたから分かる。
けれど同時に節操なく相手を魅了するカノンに自重して欲しかった。

「レオン様は、いつお知り合いになられたのですか？」

「……言いたくない」

「僕だけに言わせるとは中々……けれど、今ので確信しました。レオン様は記憶操作されていませんね？」

昔から、ホーリィロウにだけは上手く嘘をつけない。レオンは嫌になりながら、

「頼む、もう少しだけ報告は待つてくれないか？」

「……仕方がありません。とりあえずレオン様の記憶操作がされていない事など、不安用件は幾つか排除できたのでそれだけは上げておかないと。ただでさえ、カノン君に貴方様が半殺しにされた件で、色々面倒なのに」

「何故半殺しされた事を知っている」

「前から貴方方の監視はされていたのですよ？ もつともあのカノ

ン君の恐ろしさに、監視して、いざという時に手助けをするよう派遣した者が、動く事も出来なかつたといふのですから、……」

「かといって今離れさせるのも難しいと、

「カノン君、本当にレオン様が好きですかね……しかも魔王というだけあって魔力も巨大ですし」

「という事はカノンを口説いている間は、連れ戻されなつてことだな！」

天啓を得たようにかつとレオンが田を見開いて、ホーリィロウは溜息を付いた。

「……そこまでして戻りたくありませんか？」

「あんな針でちくちくされるような場所にいるのヤダ。このフリーダムな世界で俺は生きて生きたい。切実に」

「目的と結果が逆になつたような気がしますが、いつか終わりは来ます。その時、カノン君とは別れなければならなくなるでしょう？」

「その時は、カノンに攫つて貰つから良いや」

「縁起でもない……貴方様は一人っ子でしょ？」

「いや、従兄弟がいるからいいんじゃね？ 父上の弟もいるし」
氣楽にのたまうレオンに、ホーリィロウはこれ以上言つても仕方が無いなと口をつぐむ。

いざれ分かる事だ。

そして、その時がホーリィロウにとつても最大の機会なのだ。

失恋された時に優しくされると好感度↑↑。

きっとレオンにもカノンにとつても、カノンがホーリィロウとくつ付くのが最適な形なのだから。

問題なのは、レオンにカマをかける過程で、カノンの印象を悪くした事だ。

さて、どうしますか。

偶然を利用するのはホーリィロウにとつて簡単な事だった。

ただ使える偶然がそうやすやすと来るかどうか、それも難しい問題だった。

今直接手を出せば、更に好感度が下がつてしまいそつなので、ホーリィロウはとりあえず様子見する事にした。そこで、

「話はそれで終わりか？」

「……ついでの噂なのですが、魔王カノンカースは魔族の四天王と仲が悪いそうです。そう、僧侶のいた、光の神殿に光の神からお告げがあつたとか」

「……どう考へても、カノンを落としに来たよう」しか見えなかつたが

「そもそも、魔王であるカノン君が外に出て来る事自体異常では？」

「……それは」

「レオン様に、ホーリィロウ様！」、こんな所で話していいであつち行つてのみましううう

「そつらの、ろめろめ」

突然乱入してきた、酔つ払つたイオと僧侶イータ。とりあえず、レオンは二人の面倒は大変そうなので、ホーリィロウを突き出した。そしてそのまま全力で、その場を去る。

「やられた」

ホーリィロウはそう呴いて、酔つ払つた二人に引きずられるようになづるすると宴会の輪へと連れ戻されたのだった。

ぼんやりとカノンは月を見ていた。

「満月まで後どれくらいか……」

そう、憂いだように呴いたのだった。

全てには理由がある（後書き）

お気に入り、評価ありがとうございます。とても励みになります。

次の更新は、後一回したい。よろしくお願いいいたします

屋根の上でカノンは膨らみ始めた月を見ていた。

白く輝く月が夜空の中できらめく存在感を増していっているのを見て、満月になつた時はうれしく思つた。

満月の時に起こる魔物の衝動。
人を喰らい廻くし、血を啜りたく
なる耐えようのない衝動。

嫌いな奴には起きないよ！ではあるが、
ナレッジの衝動は、子をばらの間手ごね即

イオもトランも良い奴で好き。

レオノンは多分ガーナンの仲間で、迷宮

それせどいか嬉しいにひいて好き

もしもカノンがそれを抑えきれなかつたとしたら？。

考えて、カノンは恐ろしくなる。レオンがいなくなることが怖い。笑いかけてくるレオンの顔が次々とカノン頭に浮かんで、ドキド

そこで、先程ホーリィロウがレオンと話していた時に、カノンのことを魔物と言っていたのを思い出す。

魔王ということがバレていないとしても、魔物だと知られたら？。あのホーリイロウは一見、カノンに好意を持つているようにも見えるが、カノンが魔物だと看破していた。

御に異音がのしから屬物に蘭である

七?

「本当にカノンはぐるぐる表情が変わつて面白いな」「わ！」

れ
！」

すぐ傍で、レオンがカノンの顔を覗き込んでいた。
油断していたとはいえ気配すら気づかずに考え込んでいたなど、

カノンは悔しい。

そんなカノンの心中など知らず、レオンはカノンの頭に手をおいて撫ぜた。

「カノン、ありがとうな」

「え?、お礼を言われるような事は……むしろ僕が言わないといけない」

「カノンが、勝つてといつてくれたから勝てたんだ。今まで、いつも勝てた試しがあまりない」

「……幼馴染みなのか? ホーリィロウと」

「幼馴染……昔から知つてているという意味で、そうかもしぬないが、カノンは知らないはずだ」

「そつか……」

間違えた質問をしてしまったのではとカノンは不安に思うも、面識がないらしい。ほつとするカノンを見て、レオンは微かに笑う。それに気づいてカノンが、

「なんでそこで笑うんだ」

「いや、ちょっとだけ焼き餅を焼いてくれたのかなって」

「……なんで焼かなくちゃいけないんだ、僕が」

「いや、大事なお友達が他の奴と仲良くしていたら焼くものだぞ?」

「そ……そうなのか」

だからこんなに不安な気持ちになつたのかとカノンは思う。

そんなカノンにレオンは寄りかかる。

それだけで何故かカノンは胸がドキドキしてたまらない。

一方レオンは、触れた場所からカノンの体温を感じて、どこか幸せな気持ちになつた。だから、口にしてしまつたのかもしれない。

「俺はダメな奴なんだ」

「……何を今更」

「はは、そうだな。……俺、才能がなかつたんだ」

「……剣の才能はそこそこ有りそうだけれど?」

「それでも、ホーリィロウには敵わないさ。俺の才能は、先天的な

ものだつた

「……そつか。だがその先天的な才能が無くて、何でダメなやつなんだ?」

「え? いや、そういう価値観だから」「じゃあレオン達の中では、そつなんだうな」

レオンのその言葉に、カノンは父の事を思い出して頭にくる。父は優しくて綺麗なのに、力が弱くとも凄く魅力的なのにいつも自分が弱いことに負い目を感じていた。

今聞けばレオンもそう。下らない狭い価値観に捕らわれて、傷ついて。

けれど、その弱さがあるからこそ、優しさと、それ故の厳しさがあるのだとカノンは知っていた。

「価値観か、じゃあ、カノンは俺の事どんなふうに見える?」「変態」

一言で言い切つたカノンに、レオンは笑い出した。

「そうだよな、確かに変態だな」

「分かつているのなら少しほ治せ。それさえ直せば、もっと素敵な勇者になる」

「……今の俺は嫌いか?」

「好きだよ。変態だとは思つけど」

その答えにレオンは満足して、眠くなつてきてしまった。安心したせいかもしれない。

「俺が弱かつたから、カノンに会えたんだ。だからその弱さも、カノンが認めてくれるのは嬉しい」

「そうか」

夢心地で話すレオンに、カノンは暗い感情を覚える。

そのレオンの本当の幼馴染みが羨ましい。

弱いから会えたとレオン言つてゐるが、カノンの中にそんな記憶はない。

本当に自分がレオンの幼馴染みだつたならどれほど良かつたのだ

もう少し思つて、カノンはその考えを打ち消した。

今までカノンは一人で色々やつてきたのだ。だからこれからも大丈夫。

誰かと共にいなくても、カノンはなんだつてできるはず。
だから、そんな風にレオンの本当の幼馴染でいられたならと思つ
のは気の迷いにすぎない。

そんなにカノンは弱くはないのだから。

それに城に変えれば父様だつて、気に食わないがレイルだつてい
る。寂しいはずがない。

けれどそんな理性的な考えとは裏腹に、心に穴が開いたような寂
しさをカノンは覚えたのだった。

お戻りに入り、評価ありがとうございます。とても励みになります。
次の更新は、1/1 午前6:00頃出来たらいいなと想っていた
りします。間に合わなかったらごめんなさい。
よろしくお願いいたします

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0618z/>

戦う魔王様!?

2011年12月31日22時50分発行